

吾輩は
ウマである

四十九院明美

イラスト/外鯨



吾輩はウマである
東京優駿、彼岸過迄

著：四十九院暁美

イラスト：外鯨

四十九院文庫

吾輩はウマである。

東京優駿、彼岸過迄

序

親譲りの無鉄砲で小さな頃から損ばかりしている。

小学校にいる時分、近所の牧場に積まれていた干し草の上から飛び降りて、すぐにいた白毛の友人の腰を抜かせたことがある。何故そんなむやみをしたのかと聞く者もいるかもしれぬが、別段なんてことはない。病弱で気弱な友人がそんな所に上ったら危ないよ、早く降りておいでと云ったからである。白毛の友人を背負って帰った時、親父が大きな眼をして干し草の上から飛び降りる奴があるかと云ったので、この次は奇麗に飛んで見せますと答えた。

ある時友人が、風邪をひいて学校を休んだ。見舞いに行くと、絵本があれば暇しないのにと云ったから、ならば私がどんな本でも買ってやろうと請け負った。私はいつこのことが大好きだから、こいつの願いならなんでも叶えてやろうと思っていた。友人は私の言葉を冗談と思つたのか、困り顔で笑いながらじゃあ青い薔薇の絵本が欲しいなと注文したから、これを私は真に受けて、それくらい任せておけて云つて、ひとりで田舎くんだり都会に向かった。

幸い何事もなく絵本は手に入れたが、急にいなくなつたことで近所を巻き込んだ大騒ぎになつた。夜になつて家にひよつこり帰ってきたら、両親にはどこをほつつき歩いていたんだとこつぴどく叱られ、友人にはもう会えないかと思つたとおいおい泣かれてしまった。慌てて本を買いに行つていたんだと袋を見せたら、今度は私なんかのためにとまた泣かれてしまったから困つてしまった。

この外いたずらはだいたいぶやつた。白毛の友人と、隣町から来たというウマ娘のスペシャルウィークを連れて、茂作の人参畠ばたけをダートに見立てて、半日ほどかけっこをしたことがある。色の良い人参がそこかしこに埋まつていたから、全部引っこ抜いて、友人が制止する声も聞かずにスペとふたりで半日駆け回つたら、畠がすっかり泥山になつてしまった。引っこ抜いた人参は、このまま放つて置くと腐つてもつたいないので、それぞれで持つて帰つた。夕飯に出てきた蒸し人参のステーキは美味であつた。

夜になると、顔を真っ赤にした茂作が家に怒鳴り込んできた。人参をどこへやつ

年末には白毛の友人の家で有マ記念を見た。この日の有マ記念は、かのオグリキャップ最後の出走とあって、みんなして大いに盛り上がっていた。私はオグリキャップが好きである。テレビで最初にレースを見たのが、二年前のオグリキャップとタマモクロスの天皇賞で、それ以来はずっとオグリキャップを好いている。雨の日だろうが風の日だろうが関係なく暴れまわっていた私でも、オグリキャップのレースとなれば大人しくなるから、両親は私が何かする度にオグリキャップを使って機嫌を取っていたほどだ。

有マ記念はオグリキャップの一着に終わった。実況が涙声でオグリ一着と何度も叫んだ。私たちも一着だと涙声で何度も叫んだ。人々の夢と、期待と、願いと、多くの想いが幾重にも畳み上げられて、オグリキャップの名は日本中に響き渡っていたこの日から、私の中にはレースに対して明確な憧憬しょうけいが芽生えた。もともと、走るのが好きだったからだろう。いつかは私も、あんな風にレースを走りたいと願い、いつしかオグリキャップに憧れるようになったのだ。

小学校を卒業すると、私とスベは、札幌の地方トレセン学園に入学した。白毛の友人はどうしても体調が優れないまま、学校にはいることはできなかったから、私たちはあいつの想いを背負い、この学園に進学したのである。

だが、どうにもこの地方トレセン学園のやり方が気に食わぬ。地方トレセン学園などと名乗ってはいるのだが、やることと云えば普通の勉強ばかりで、走りの授業はちつともやらない。模擬レースをするとなつても、クラスでやる気があるのは私とスベだけで、他の生徒どころかトレーナーや教師までがちんたらしているから、模擬レースにしたって勝負にすらならない。

放課後には学年関係なく真面目な奴らと集まり、それらしくチームも作って、トレーナーの真似事をしながら一緒に走っていたが、それだつて限界がある。白毛の友人の願いを叶えるためにここへ来たというのに、学園全体がこんなにも意識が低いのでは、まったく疲弊するばかりで我慢もならぬ。こんなでは、走ったつてちつとも楽しくない。

さすがにこのままでは好かないから、中央とは比べるべくもないが、しかしここもトレセン学園の看板を掲げているのならば走りに真面目であるべきではないかもある時偉そうな赤シャツの教師（赤シャツは実際この理事長で偉い奴だった）

に直訴しに行った。

ところが赤シャツはホホホと女みたいに笑って、どう足掻いたって地方が中央には敵わないから、これで良いのだと云うので、思わず閉口した。その口調があまりに当たり前であったから、私はかえってギョツとしたほどであった。

私が呆気に取られて黙っていると、赤シャツは何食わぬ顔で「向こうには皇帝と名高い、三冠ウマ娘のシンボリドルフを筆頭に、女帝エアグルーヴ、スーパーカールゼンスキー、怪物ナリタブライアンと、有名有力な者が多数。新入生にまで模擬レースで無敗と噂のテイエムオベラオーまでいるのに、どうして地方がこんな設備と安月給で、しかも無名のウマ娘をイチから育てるなんてやってられますか」とべらべら云う。職員も一同これに頷き、無駄な努力はするもんじやないと笑った。

腑抜けも腑抜けな云い分だ。追いつく努力も何もしていないのに、中央に敵わないと諦めるなんてのは、それこそよっぽど腐つていやがる。忌々しい。恥知らずにしても限度がある。私なんぞ、非才の身だからと必死にいろいろ勉強して労しているのに、肝心の教える側が、ここまで無様で負け犬にもなれない下劣な性根ならば、それも台無しだ。情けなくって涙も出てこないくらいだ。

赤シャツの物云いに心底腹が立った私は、給料を貰うだけの楽な仕事をしている奴が、何を偉そうに喋るかど怒鳴って、赤シャツの机を、せんべいみたいにペしやんこにして、窓から投げ捨ててやった。すると赤シャツ一派は仰山に怒り、お前のようなドロップアウトは退学だと大声で怒鳴って、私を職員室から追い出した。こんな連中が学園を立てていりゃあ世話ない。私のほうこそ、こんな腑抜けと恥知らずしかない学校なんか願ひ下げである。

無能極まる教師どもに見切りをつけた私は、考えを同じくするスベや、チームの奴らを誘って、地方は教師の質が悪く満足に走れもしないから、どうかこれを改善してほしいという旨の手紙を中央へ出した。こんな手紙が来たらさすがに中央も無視できんだろうと思って、内容は少しばかり大げさにして手紙に書いておいた。

そうしたら一週間と少し後になって、あのシンボリドルフとエアグルーヴが直々に札幌地方トレセン学園にやってきたから、みんなと一緒に腰を抜かすほど魂消てしまった。よもやここまで大事になるとは、私も思っていなかった。

何の知らせもなしに来たふたりは、学園をさんざんに騒がせると、私たちを理事

長室に呼び出してまず挨拶をした。

「初めまして。知っているとと思うが、自己紹介をしておこう。私の名前はシンボリドルフ。中央トレセン学園で生徒会長をしている者だ。そしてこちらは副会長のエアグルーヴ、今回は私の手伝いで来てくれている」

それからシンボリドルフは、この手紙を送ってくれたのは君たちかなと、懐かしくよく見覚えのある手紙を取り出して、私たちに見せた。いきなりのことになど理解が追いつかない我らは、ほとんど呆然とした面持ちで頷くしかできなかった。私たちの反応を見ると、シンボリドルフはそうかありがとう。呼び出してすまなかつたねとすぐに私たちを理事長室から退散させた。部屋から出る時にちよつとだけ後ろを振り返ると、シンボリドルフがほんの一瞬だけ、探偵が犯人を確信した時のように眼の色を変えていた。エアグルーヴもかすかに目を細めて、赤シャツに侮蔑の視線を向けていた。赤シャツはおべつかを使うのに必死で、ふたりの変容にはちつとも気づいていないようだった。無知つてのは怖いもんだ。赤シャツが今期で理事長を解任されるのと、札幌のトレセン学園が中央所属になるという報知が来たのは、それからすぐのことである。

白毛の友人が死ぬ二、三週間前に、チーム宛てに転入試験の案内が来た。皇帝殿が気を利かしたらしい。千載一遇の好機だが、みんなは札幌が好きだから離れたくないと、これを突っぱねてしまった。私とスベも白毛の友人のことがあるから、これを受けるとかどうかでだいぶ迷った。しかし白毛の友人に、私たちが中央で走っている姿を見たいとお願いされたので、転入試験を受けることに決めた。試験は筆記と実技が難しいものだったが、面接までいけばどうと云うこともなかった。

一週間も経つと通知が来た。無論合格である。これで中央トレセン学園に通えることになったので、さっそく白毛の友人に伝えた。友人はたいそう喜んで、私とスベにきつとダービーを走って欲しいと云った。スベはお母ちゃんとの約束があるからジャパンカップも走りたいと云い、私もそれなら有マも走るべきだろうなと云って三人で夢の話で盛り上がった。

生粋北海道から出たことのない我らは、それから東京という土地に思いを馳せてはいろいろ話し合った。

聞くに東京の街は人がたくさんいて、札幌とは比べ物にならんくらいに煩雑とし

ているようだ。流行り廃りも北海道とはひと回りもふた回りも早くて、こちらで流行っているものが向こうではもう時代遅れになっているという。今はタピオカなんて云う、黒い蛙の卵みたいなのが一杯はいつた飲み物が流行りらしい。私くらい年頃は、みんなしてこれを飲んでると云うから魂消た。都会人というのは田舎者の私たちよりよっぽど野蛮人らしい。

少しして、荷造りも終えてあとは中央へ行くだけになった時分に、とうとう白毛の友人が危篤になったという報せが来た。そう早く悪化するとは思っていなかった。少なくとも私がダービーを走るまでは持つと思っていた。

慌てて病室に駆け込めば、もう虫の息である。手を握って大丈夫かと声をかけると、息も絶え絶えに掠れ声で「ふたりが走ってる姿を見たかった」と云うから、私は大声で「滅多なことを云うな！ 私はダービーも有マも走って勝って、それでお前のことをみんなにじまんしてやるつもりでいるんだ！ だから、こんなところで、しぬな！」と云って聞かせた。スベも必死になって「やくそくするから、おいてかないで」と涙ながらに呼びかけた。

けれども白毛の友人は、私たちの答えに満足そうに笑って、そのすぐあとには、はるかな大空の彼方に旅立って行った。冷たくなった友人の傍で、私はスベと抱き合ってわんわん泣いた。やがて声が枯れて、涙も尽きて、夜が明けるまでずっと泣いた。この創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

白毛の友人が死んでから、私は髪のひとつ房を白く染めた。これは私の、あいつの最後の願いを叶える覚悟と、姉貴分として妹分のスベを守るという決意の証である。そしてそれと同時に、あいつがこれを通して私と同じ景色を見てほしいと云う、願いが籠っている。私は私だけのために走るのではない。あいつとあいつの願いのために、そしてスベのために走るのだ。

髪を染めてから学園に行くと、真つ先に解任直前の赤シャツが食いついた。私の髪を見るなりすぐさま鬼の首を取ったみたいな勢いで、おやその髪は校則違反じゃありませんかね。その素行不良は向こうに報告しておきますからねだのと、女々しい口調でねちねち嫌味を云ってくる。

赤シャツの仲間らしい教師たちも同調して、お前みたいなのが中央へ行つたところでおオープンも出られんだろう。お前みたいな下品な奴が、格式高い中央のレース

を走れるものか。なんて押し並べてああだこうだと文句を云ってくる。いつも矢面に立ってたのが私だから、こぞって云いに来ているんだろう。

仕返しのつもりなのかもしれないが、どうせ向こうへ行つたら二度と会わぬ奴らだ何を云われたところで、ちっとも怖くない。大人のくせに、小娘ひとり相手にこんな情けない仕返ししかできないこいつらが、私にはかえって哀れにさえ見えた。

しかしいくら哀れたって、こうやられっぱなしなのは私の性に合わないので、仕返しがてら今までお世話になりました。このことは中央に報告しておきますと職員室の扉を蹴り壊して別れの挨拶をしに行つてやつたら、それだけはやめてくれと一同から泣きつかれたのが、つい二日前のことである。

いよいよ約束が極まって、もう立つと云う前日にスベと白毛の友人の家を尋ねた居間の隅っこに仏壇と遺骨が置かれていた。私たちが向こうへ云ってくるぞと遺骨に挨拶を済ませると、友人の両親は、寂しそうにも心配そうにも見える顔で微笑んで、本当にあの子の願いを叶えてくれるつもりなのかいと聞いた。私も単簡たんかんにくとは思っていない。決して順調にはいかないだろう。それでもあいつの最期の願いなのだ。無茶も道理も蹴つ飛ばして、これを叶えてやるのが親友の役目だろう。私たちが自分の決意を伝えると、ふたりはわずかに涙を流して、ありがとうと礼を云つて、両腕で力いっぱい抱きしめてくれた。私たちも抱きしめ返して、きつとあいつの夢を叶えるから見ていてほしいと云つた。

出立の日になると、朝から知り合いと家族のみんなが見送りに来た。

チームの奴らは意地っ張りだ。寄せ書きと北海道神宮のお守りをよこして、「G1で勝つまでふたりとも帰ってくるんじゃないぞ」とみんな泣き笑いして云う。もちろんそのつもりだ。札幌記念では覚悟しろよと云つたら、その時は返り討ちにしてやると云うものだから、みんなで大いに笑つた。

スベのお母ちゃん「目指せ日本一」と書かれた、やたらでかい看板を持って駅まで見送りに来た。スベのお母ちゃんは外人さんで、とにかく肝つ玉お母ちゃんである。「ふたりともけつぱんだよ」なんて、人目もはばからず大声で応援してくる。スベは人の眼を気にして恥ずかしがっていたが、私は嬉しい気持ちでいっぱいであった。

白毛の友人のご両親は、あいつの写真と一緒に来ている。挨拶に行くと「あの子と

一緒に、君たちの活躍と健康をここから祈っているよ」と笑うから、私は力強く頷いて、夢を叶えるまで会うことはないでしょう。随分ご機嫌ようとしてそれだけ云った。

電車に乗り込むと親父が私の顔をじつと見て「向こうへ行っても人様に迷惑をかけるんじゃないぞ」と云う。お袋も「あんたは暴れん坊の聞かん坊だから心配だよ」と云った。ふたりとも眼に涙が一杯たまっている。私は泣かなかつた。しかしもう少しで泣く所であつたから、余計なお世話だと強がつて笑つて見せた。

電車が動き出してから、窓から首を出して振り向いたら、みんなが手を振つていた。私もスベも元気に手を振り返して、行つてくるよと声の限りに叫んだ。涙は風に解けて、日差しの中に消えていった。

壹

スベと一緒に千歳から飛行機に乗って、無事に本州の土を踏んだが、ここから中央トレセン学園にはどこをどう行けば良いのかわからぬ。構内に貼られた案内図を見ても、蜘蛛の巣のように複雑としていて、どの駅から乗り継げば良いのかいまいちわかりにくい。駅ひとつでも故郷とは全然違うもんだ。向こうの地図はもつとさっぱりしてわかりやすかった。

結局どれだけ案内図と睨めっこしてもわからんままだったので、しようがないから乗り換え用らしい見たこともない切符を買い、私たちはやっと、いかにも安物のマツチ箱のような電車に乗り込んだ。

三十分ほどごろごろと電車に揺られている間、スベが車窓から見える都会の景色に、子供みたいに騒ぐものだから、他の乗客に一斉に見られて恥ずかしくなった。電車でおだつんじやないよと窘めると、スベも周りの視線に気が付いておとなしくした。ちよつと電車に乗ったくらいで騒ぐた、まだまだ子供なものだ。まったく世話のかかる妹分である。

騒がしくしてすみませんと周りの乗客に謝っていると、隣に座っていた子供の母親が急に、トレセン学園に行かれるんですかと聞いてきた。私がそうですと答えると母親はすごいですねと感心して、不思議に首を傾げる子供に、お姉ちゃんたちは選ばれたウマ娘で、とつても速いんだよと云って聞かせた。そしたら、子供が歓声を上げて私たちを見てきたから、ちよつとだけ得意になった。どうも話のわかる母親である、きつと良妻賢母に違いない。

スベと一緒に子供に構っている、東府中に着いたので親子に別れを告げて駅に降りた。府中というからには、トレセン学園に近い場所であるのだろうと思つたが、周りを見てもいやにウマ娘の姿が少ない。休日にしたつて変だ。都会のウマ娘ってのはみんなきやいきやいしていて、タピオカとか云う蛙の卵みたいな物を飲んでいて聞いていたのに、それらしい奴らは全然見かけない。こいつは降りる駅を間違つたかもわからん。

近くの駅員にでも聞いてみるかと考えていたら、勇んで先を進んでいたスベが勢いよく改札に引っかかっているのが見えた。お前は何をやっているんだと呆れたら切符を通すところがなかったから、そのまま通つていいのかと思つたと云う。そんなはずがあるかと見てみたら、確かにそれらしい穴が見当たらない。妙な改札もあつたもんだ。

ふたりで首を傾げていると、近くで見えていた駅員が片腕を上下させて、タッチだよとまたわからんことを仰る。とりあえず指示に従つて、光つてる所に切符をかざしたら、駅員は慌てて違つて違つてと首を振る。ますますわからなくなつた。結局どうしたらここを通れるのだと聞けば、端にある切符用の改札に案内されたからふたりで間抜けを晒したと恥ずかしくなつた。

改札を抜けて周辺地図と睨めつことをしていると、さっきの駅員がトレセン学園の最寄りには次の駅だよと云う。嬉しくないことに私の予想は当たつていたらしい。嫌な予感というのはどうしてこうも当たるのか。世の中とはかくも理不尽なものである。

さて困つたぞと腕を組んだが、駅員が私たちを田舎者と察して、お嬢ちゃんたちは転入生かいと聞いてきた。そうだが何かと答えると、どうせならレース場も見てきたらどうだいと地図を指した。何でも今日はシリーズの開催日で、もうすぐレースもやるから、これを見に行つても決して損はないと云う。レースを見たがつたスベは、駅員の提案にふたつ返事で頷いた。私もこちらのレースが見てみたかつたので、右に倣つて頷いた。

レース場へは少し距離があるというので、電車で行くことにした。別段走つて行ける距離にあつたから走つて行つてもよかつたのだが、スベと並んで走るといつの間にか競争になつてしまふからまずい。街中で競争なんてしたらすぐにしよつ引かれる。初日から警察のお世話になつて、早々に不良のレッテルを貼られるのは私もスベもごめんである。

五分ほど電車に乗つて行くと、もうレース場に着く。改札を出てレース場の前まで行くと、シンボリドルフの銅像と、有名なウマ娘の立て看板がまず私たちを出迎えた。正門をくぐつて中にはいれば、たくさんの人がレースの開始を今か今かと待っている。道にはいろいろな屋台が連なつていて、何かと騒がしくしている。建物

前の広場では、何故かしょんぼり顔をしたシンボリドルフの着ぐるみが子供たちに風船を配っていたから、私たちもありがたく風船をもらって、鞆に括りつけておいた。

食い物の屋台につられて涎を垂らすスベを引きずり、えんやこらと客席のほうに向かうと、雲霞の如くに人で埋め尽くされていたから、ふたりで立ちすくんでしまった。故郷のレース場もそれなりに大きかったが、こうして本場を目の当たりにすると、やはり府中と比べれば月とすっぽんである。私たちもいつかはこれを前にして走るのだと思うと、我知らず武者震いまでを覚えた。

ふたりして突っ立っている、ふとパドックの方角で歓声が上がった。何かと思つて行つてみたら、レース前の見せが行われていて、今はちょうどサイレンスズカとかいう栗毛のウマ娘が出てくるころであつた。サイレンスズカはランウェイの先端に立つと、羽織っていた上着を脱ぎ棄ててその凜然とした姿を衆目に晒した。

放送では一番人気のウマ娘だと云っていたが、なるほど確かに、見れば儂げな透明感があつて人気が出そうな雰囲気を感じている。十人以上いる中で一番なのだから、きつと速くて強いウマ娘なのだろうと思つた。しかしスベがこいつの容姿にやられて、見惚れたように奇麗と呟いたから、途端に私はこいつがあんまり好きでなくなった。

サイレンスズカが下がつていくのを睨んでいると、スベがいきなりぎやあと頓狂な悲鳴を上げたから、私まで驚いて飛び上がった。すわ何事かと見てみたら、なんとスベの脚を壮年の男が何やら真面目腐った顔で撫でている。我が妹分に白昼堂々と痴漢とは恐れ入った。度胸に免じて片腕一本で許してやると腕を捻り上げたら、良い脚をしていたからついと云う。都会の変質者とは随分と素直だ、これなら警察も勞せずに手錠をかけられるに違いない。変なところで感心していたら、この変質者は私の脚を見て、引き締まっていながら弾力を失つてない良いトモだ。得意な距離は長距離で、走り方は追い込みだろうと私の脚質を云い当ててきたから、魂消てついで手を放してしまった。

まさかちよつと見ただけで私の脚質を当てるとは、この変質者はただの変質者ではないのかもしれん。スベもこの人ただの変質者じゃないよと眼を真ん丸にして云

う。私はこいつの素性にいささか以上に興味が湧いてきたから、やいお前自分がどう云う輩か云い訳してみせろと凄んでみせた。

変質者は慌てて、俺は中央トレセン学園でトレーナーをしてる者だと云い、懐からトレーナー証を取り出した。見てみれば確かに、中央トレセン学園所属のトレーナーであると書かれており、その下には沖野という名前が連なっている。

にわか信用できんので、念のためにトレセン学園に電話をして確認してみるとちゃんとこいつは中央の所属であると答えが返ってきた。また、人一倍にウマ娘想いなのだが、気持ちが行き過ぎてちよつと問題行動も多い奴だとも伝えられた。なるほど、中央でトレーナーをしているならば、私の脚質を云い当てられたのも納得である。しかしそれはそれとして、トレーナーだからと公衆の面前で乙女の足を触るのは常識に欠けていよう。本人は邪な考えはひとつもなかったと弁解しているが我らのような素性を知らん奴からしたらただの変質者である。

大人なら我慢くらいしたらどうだと云うと、この変質者はごもつともですと真摯に頭を下げて、反省の意を私たちに見せた。故郷の大人に比べれば気持ちの良い奴だと思った。自分の間違いをちゃんと認めて、生意気な子供なんぞにすっかり頭を下げるなんてのは、なかなかできることではない。きつとこいつは、悪癖を除けば評判通りすこぶる善いトレーナーなのだろう。

スベはこの謝罪で、こいつを許す算段を付けたようだった。だが私は、大人というのは腹の底で何を考えているのかわからん生き物でもあるから、いくら気持ちの良い奴だからってそう安易には信用できん気持ちでいた。被害者たるスベが許すと云っているからもう何も云わないが、また何かしたら今度こそ腕をへし折ってやるつもりだ。しかし実際に腕を折る機会はないに終わった。

見せも終わってレースの時間になると、私たちはメインスタンドに移動して芝の緑を見下ろした。日が強いので芝がやに光る。見つめていると眼がくらむ。遠く見えるゲートには、出走するウマ娘たちが次々ゲートにはいつていく様子が見えた。沖野に誰が勝つかと聞いてみると、すぐサイレンススズカだと答えた。実際ゲートが開いてレースが始まると、威勢よく一番にサイレンススズカが飛び出して、そのままひとり旅で一着になってしまったから、一番人気は伊達ではない。

サイレンススズカが立ち止まって観客席を見ると、見ていた奴らが一気に歓声を

上げた。私も中央つてのはすごいもんだと拍手をしていたのだが、スベがあいつの圧倒的な走りに感銘を受けて、憧れを抱いたようであったから、やつぱりあいつは好きになれん。

「あんな風に観客を沸かせて、みんなに夢を与えられるウマ娘はひと握りだ」

ふと呟いた沖野の言葉には実感が籠っていた。それはおそらく、私たちのように地方から出てきたウマ娘たちが、夢破れて去って行く姿を何度も何度も見てきたがゆえの、哀憐の類であったのかもしれない。

サイレンススズカが芝から去ると、時間になったので私たちもそろそろ学園に行かねばならなくなった。沖野はウイニングライブを見ていかないのかと聞いてきたが、見ていたら約束の午後六時を過ぎてしまう。初日からいきなり遅刻は心証が悪いものだ。そういう訳だからこらで行きますと云うと、沖野はじゃあしようがないと快く送り出してくれたから、私たちは後ろ髪を引かれることなくレース場を後にした。

来た道を引き返して府中まで電車に乗って行くと、私たちはついに中央トレセン学園と対面した。中央トレセン学園は、西洋屋敷を思わせる大きな正門がまずあって、そこからずっと玄關まで、御影石で敷き詰めてある小奇麗な道が続いていた。遠めに見える巨大な校舎は、斜陽を受けて茜色に輝いているようにも見えて、都会の学校というのは外見からしてこんなにも洒落ているのかと、ふたりして呆けてしまった。

すっかり魂消たまんま突っ立っていると、全身を真緑の服で着飾った妙な女が声をかけてきた。この真緑の女は、はやかわ駿川たづなと名乗った。この学園の理事長秘書であるらしい。しかし奇妙な服である。その服装は都会の流行りかと聞いたら、苦笑いで制服ですと返されたから、都会の制服つてのは随分と悪趣味じゃないかと、こちらに來たことをわずかに後悔した。校舎が奇麗でも制服がこれじゃあ台無しだ。案外地方の奴らはこの落差に絶望して帰ったのかもしれないとまで思った。それが私の思い違いであったと気が付いたのは、すぐのことである。

駿川たづなの先導に従って、校舎にはいり、廊下を歩いていると、途中から青紫色の制服を来た生徒にたくさん逢った。見ない顔が駿川たづなと歩いているからなのだろう、どいつもこいつも物珍しそうな視線を私たちに向けてくる。衆目にあまり

慣れていないスベはすっかり委縮して、みんな見てきて何だか怖いと弱気になってしまった。

視線くらいで何を怖がることもあるもんか。来たばかりでもう負けていては世話がないではないか。私は袖を掴んでくるスベの手を解くと、これからはここに身を置くことになるのに、いきなり気持ちで負けては日本一のウマ娘なんぞ夢のまた夢だ。こういう時は私のように堂々と歩くがよろしいと云ってやった。スベはそれで、少し元気を取り戻したようであった。

駿川たづなはまず最初に、私たちを理事長室へ通した。驚いたことに、この理事長というのは子供ほどの背丈しかなく、しかも頭に猫を乗せた奇怪な女である。やに快活な笑みを浮かべていた。

「歓迎！ 君たちのような気概ある生徒は、我々としても実に好ましい！ この学園の生徒たちにとっても、良い刺激になるだろう！」

子供理事長はむやみに大声を張り、大きな校章の捺^{かさ}った封筒と、寮部屋の鍵を渡した。この封筒はこちらで生活するにあたって、入用になる諸々の申請書の束がはいつていた。それから、頭から猫を除けると、札幌のトレセン学園での出来事について言及して、自身の不徳が致すところであると、駿川たづなと一緒に深々と頭を下げた。

「陳謝！ 今回の一件は、地方と中央の格差をわかつていながら是正^{ぜせい}できないままにいる、私たちの不手際である！ 君たちが存分に走る場を提供できず、あまつさえ故郷を離れさせてしまったこと、我々職員のせいで、不快かつ不愉快な思いをさせてしまったこと、そして、君たちの大事な夢をわずかにでも貶^げしめてしまったこと、非常に申し訳ない！ ゆえに、懇請^{こんせい}！ これからは一層の努力をもって、二度とこのようなことが起こらぬように尽力するので、どうか我々を許してほしい！」

どうも驚く。理事長なんて偉い役職のくせに、誠実なもんだ。いっとう偉い奴なら遠い田舎の出来事なんか、大抵その責任者の不祥事だ何だで片づけて、さも自分は悪くないように振る舞うもんだらうに、全部自分のせいにして謝ってくるなんてよっぽどできんことだ。奇怪な恰好をしているが、なんだ見かけよりも立派で、気持ちが良い奴じゃないか。私はこの時から子供理事長が好きになった。

私は子供理事長と駿川たづなに顔を上げるように云うと、そういうことなら今回

のことは水に流すと伝えた。向こうでは散々に腹の立つようなことを云われたが、元より別段気にしちやいな。ただ向こうで真面目に走る気にいる奴らが、気の毒なばかりである。スベも私がそれで良いならと頷いて、向こうでのことはさっぱり許すと云った。

私たちの言葉に、子供理事長と駿川たづなは心底ホツとした様子で、重ね重ね謝罪と礼の言葉を私たちに述べた。慇懃無礼いんぎんぶれいだった赤シャツ一派とは大違いだ。こんなにもちつこくて善い奴がへこへこ頭を下げて、赤シャツみたいな虫の好かん奴がむやみにふんぞり返っているんだから、世の中つてのは理不尽にできている。

はいる時よりも恭しく礼をして理事長室を出ると、駿川たづなは本当に今回の件は申し訳ありませんでしたとまた謝った。子供理事長も責任感の強い奴だと思つたが、さすがに秘書だけあつて、こいつも大概似た心持のようである。

私は謝罪を受け取つてから、さつき済んだことだからもう謝らなくて良い。むしろ、これ以上も謝られるとこつちが悪くなつてしまうと云つた。スベもこれを後押しして、もう謝罪は十分受け取りましたから、気持ち良く次に行きましょうと云う。駿川たづなはそれでやつと安心したようであつた。

次に案内されたのは生徒会室だつた。駿川たづなは扉の前まで来ると、私たちに今から生徒会の皆さんに会いますけれど、善い人ばかりですので、緊張せずに挨拶してくださいねと笑つた。私はそう緊張なんてしない質だからそうでもなかつたがスベは云われるまでもなく緊張して身体を固くしていたので、慈悲深い私は尻尾の付け根をくすぐつて緊張をほぐしてやつた。礼としてありがたい手刀を脳天にいただいた。

駿川たづなに促されて生徒会室にはいると、白い三日月が浮かんでいるのが見えた。生徒会長であるシンボリドルフ殿である。両脇にはエアグルーヴとマルゼンスキーがいて、我らを歓迎するように頷いていた。壮観も壮観な光景だ。こんな奴らに立つてお出迎えされるなんてのは、きつと一生かかつてでもきん経験に違いない。背筋がピンと伸びる思いである。

シンボリドルフは凜として、遠路遙々ようこそふたりともと挨拶をした。私がご丁寧にもと返すと、スベも言葉のような何かを発して頭を下げた。せつかく解いてやつた緊張がもうぶり返したらしい。

初々しいスベの様子に笑みを浮かべたシンボルドルフは、追々ゆつくり話すつ

もりだが、長旅で疲れているだろう。まずは掛けてほしいと云って、いかにも高級そうな革張りのソファに座るよう手で指した。実家のぼろつちいソファなんか眼じゃないくらいに、ふかふかのそれに腰掛けると、シンボルドルフ一同は申し訳なさそうな顔をして、君たちに苦しい思いをさせてしまった云々と、また子供理事長みたいに故郷でのことを持ち出して謝罪した。

よもやシンボルドルフにまで頭を下げられるとは思わず、私もスベも慌ててしまった。中央の偉い奴は頭を下げるのに躊躇いがなみたいただが、こう何度も何度も謝られるとさすがに座りが悪い。悪いことをしたら謝るくらいは誰でもするもんだが、非がないのに自分の非だと云うのは、いくら何でも責任感が強すぎる。逆にこつちが遠慮してしまうほどだ。

私たちはもう恐縮を通り越して半ば呆れて、もう十分以上に謝罪は受け取ったから、これ以上は無礼にあたりますと云つたら、シンボルドルフは真剣な眼で私たちを見つめた。やがて、君たちは強い心根の持ち主なのだなど云いながら笑った。エアグルーヴもマルゼンスキーも、同様の顔をしていた。

シンボルドルフはそれから気を取り直すと、本校は全国のウマ娘トレーニング施設の中でも最大規模、十全十美のカリキュラムによつて、己の目標に粉骨碎身の努力をできる場所、——とこの中央トレセン学園についての長いお談義を聞かした。

私もスベも真面目腐って聞いていたのだが、途中からいい加減になつてしまった。何せ話の最中に、シンボルドルフがむやみに同じ言葉を繰り返すのだ。もしかしてそいつは洒落ですかと云えば、いかにもと頷いて嬉しそうに喜ぶ。しかし、その駄洒落だしゃれというのがあんまりにも下手くそで、物を云うにも困るとききた。おそらく私たちを和ませようとしてくれていたのだろうが、まさか天下の皇帝殿がここまで下手くそな駄洒落を云うとは思わず、私はついうっかり、レースの強さと洒落のうまさは比例しないのですねと云ってしまった。

途端に、シンボルドルフの露骨に耳を垂れ下がる。スベからは失礼なことを云うなど親父の並みにきつい拳骨を貰い、エアグルーヴにも貴様失礼だろうとしこたま怒られた。マルゼンスキーと駿川たづなは苦笑いを浮かべるばかりであった。し

かし場の空気は和んだから目的は果たせたに違いない。

そう、こうするうちに鐘が鳴った。学校中が急にがやがやする。駄洒落皇帝が、もう夕食を食べる時間だから食堂に行つてきなさいと仰るから、話もほどほどに部屋を出て、駿川たづなに尾いて食堂へ向かった。部屋を出る前にオグリキャップはいますかと聞いたら、今は地元の笠松へ戻つてると云うから、私は酷くがっかりしたものだ。気分を変えるためか、食堂への道すがら今日はトンカツが出ますよと駿川たづなから聞かされたので、スベの腹から地鳴りみたいな音がした。

食堂は夕飯時とあつて混雑している。形式は日替わりのビュッフェ形式だが、ここにはないものが食いたいなら、食券で頼むことになる。奥の券売機を見れば、あれを食おうこれを食おうと悩んでいる奴らがたくさん並んでいた。中央は食堂まで中央級らしい。飯の種類で悩めるなんて贅沢なもんだ。向こうでは毎日出るのが決まつていて、さながら小学校の給食であつた。美味いは美味いが似たような飯ばかりで代り映えがない。給食より幅がないんじゃないかと思つたほどだ。

ビュッフェにつられて行くスベを尻目に、駿川たづなと一緒に券売機に並ぶと、十分ほどで私たちの番が来た。さて何があるかと眺めてみたら、確かにトンカツがある。せつかくなでゲン担ぎにこれを選んだ。受付に食券を渡すと色よく揚げられたトンカツが、山盛りの千切りのキャベツと一緒に出てきた。白飯とみそ汁は自分でよそえと云うので、ばかみたいにおかずを山盛りにしたスベと合流して飯をよそいに行った。

転入生というのはどこでも物珍しいから、ちやほやされるもんだと思つていたが、食堂にはいつてから誰ひとり声をかけてこない。大方、傍に理事長秘書がいるから、恐れ多くて近付けんのだろうと考えていたが、隣でスベがいつも以上に白飯をさらつていたので、私も閉口した。道理で誰も話しかけてこないはずである。そいつはちよいと取りすぎだろうと指摘すると、何を勘違いしたのか「あげません！」と怒るから付き合つてられぬ。

席を取つてくれていた駿川たづなに礼を云つて、スベと一緒に持つてきた飯を食つたが美味しいもんだ。みそ汁は味が濃くて、具にはいつてる人参も甘い。カツは厚くつて、衣もさくさくしてるから食いごたえがある。白米はさすがに故郷のほうが美味しい気がした。まあ米の良し悪しを北海道と比べるのは、内地じゃあ勝ち目がな

いから酷つてもんだ。

むしゃやむしゃと飯を食っていると、君たち噂の転入生だねと話しかけてくる者がある。見れば故郷でも噂になっていたテイエムオペラオーがいた。私がそういう君はテイエムオペラオーと応じると「そう！ ボクこそが霸王、テイエムオペラオーさ！ 知っていただけで光栄だよ！」と仰山に気障な態度で自己紹介してきたから魂消た。

いきなりこんな調子で仰々しいなら、実はよつぽど傲慢な奴なんじゃないかと疑つたが、しかし話してみると、いちいち自分を霸王だ何だと云つて持ち上げながら、こつちのことも偉大な挑戦者だのと持ち上げてくる。自信過剰だが驕つてはおらず、人並み以上に気遣いもできると見えて、なかなかどうして見かけによらぬ。こういう奴なら大歓迎だ。

次に話しかけてきたのはゴールドシップと名乗る葦毛のウマ娘だったのだが、こいつもこいつで、終始訳のわからんことを云う奴だ。会話もほとんど一方的だ。ゴルゴルだが、ゴルゴムだが、どごぞの星から来たのだとやかましい。去り際には「ゴルちゃんからの選別だぜ！」とゴム鉄砲を渡された。こんなものを渡されても扱いに困る。徹頭徹尾、変な奴であつた。

そろそろ食い終わる頃には、マチカネフクキタルというウマ娘が来た。こいつもまた濃い奴だ。占いがどうだと云つて矢継ぎ早にあれこれと質問を重ねてきたかと思えば、急につぶれた蛙みたいな声を上げるのだ。いったい何をそんなに騒ぐことがあるのかと聞けば、私の運勢を指して、今まであつた中で一番すごい。ラツキーの星の下に生まれるとのたまうから、これは気分が良い。なら幸運を分けてやろうと云つてカツを一切れ差し出すと「ハッピークッキーもんじゃ焼きー！」と両手を上げてありがたがるから痛快である。

しかし、先に会つた沖野と云い、子供理事長と云い、駄洒落皇帝殿やこいつらと云い、中央に来てから会うのはどうも濃い奴ばかりである。もしかしたらここではこれくらいキャラが濃くないとやつていけないのかもしれない。どうなのかと聞いたら駿川たづなは答えにくそうに首を傾げた。たぶん当たりだったのだろう。

腹も膨れたのでさつさと食堂を出ると、今度は学生寮へ行くと云うので尾いて行く。寮のある区域に通されると、真つ先に寮母のふたりと顔を合わせた。最初に挨拶

をした美浦寮寮母のヒシアマゾンは、清々しいくらいに姉御肌で気持ちの良いウマ娘だったから、私もスベもすぐに懐いた。タイムンは好きかと聞かれたので精神的に向上心のないものはばかだと答えた。何故だかきよんとした顔をされたが些末事である。

栗東寮寮母のフジキセキは、ひとを揶揄う癖のある気障つたらしいウマ娘で、君たちが転入生のポニーちゃんだね、会えてうれしよと甘言めいて仰る。握手を求めて右手を差し出したら手の甲に口づけをしてくるし、吃驚してスベの後ろに隠れたらおやおや初心なんだねと笑うから、こいつはひと筋縄でいかないぞと思ったまったく油断ならない、捕まったら何をされるかわからん奴だ。こいつに折檻せつかんされるようなことだけはしたくないものである。

寮母との挨拶も終わつたところで、ついにスベと別れて自分の部屋にはいった。部屋は、ベッドと勉強机がふたつずつと、あとは小さな冷蔵庫があるだけで狭いとも広いとも云えない。その上プリンプリンの空き容器やら、いつのかわからない割り箸やらが床に転がっていると、机にはやけにでかい招き猫の置物があつたりとか、しつちやかめつちやかにごみが散乱しているから、とにかく窮屈きゆうくつに感じられる。どうやらこの部屋の主は、よっぽど片付けができぬらしい。

失敬な奴だ。私も人のことを云える立場にはないのだが、さすがに同居人が来るとなつたら片付けくらいはしておく。このままでは荷物どころか脚の置き場もないので、しようがないからフジキセキに云いつけて荷解きの前に部屋の片付けをすることになった。部屋に来て早々にやるのが片付けなんて、まったく人をばかにしてらあ。

しばらく片付けをしていると、急にマチカネフクキタルが部屋に飛び込んできて「それを捨てるなんてとんでもない！ どれも私に福を呼び込んでくれた大切な思い出の品なんですよ！」と涙ながらに訴えてきた。どうやら私の同居人とはこのことらしい。しかし呆れた。私からしてみれば総じてゴミの山にしか見えないものを、こうもありがたがるなんて。いくらゲン担ぎにしたってやりすぎも極まつて、カササギでもあるまいに。こんなものに御利益があるなら、そこいらの石ころだつて御神体になりそうなものだ。

訴えを無視して袋に粗方ぶち込み、二度とほどけないように固く縛ると、ついに

は幸運が、福が去つて行くと嘆いてよよよと泣き出すのだから、もう始末が悪い。運を使い切つた物を溜めると不幸になると云うと、残り物には福があるんですよと口答えまでしてくる。

よつぽどなぐ撲りつけてやろうかと思つた。私だつてウマ娘だ。こいつひとりで借し切つた部屋じゃあるまいし、そんなことを云われたら腹も立つ。狭い所だ。同居人もいる。それなのにこりやなんだ。我が儘で押し通すんざ非人情も極まつてる。こいつは運だ何だと云つて、きつとひとり部屋でいたいだけに違いない。

しかし私は考えた。いくら腹が立つたからと撲つちやあこいつの思い通りだ。大方私が田舎者だから、調子に乗らせてからすぐ落とせば、乱暴して追い出されると考えたんだろう。粗末な策ではめ嵌めようつたつてそうはいかん。こんな私を田舎者と見縊くびつた、粗末な策になんか引つかかつてやるものか。今に云いくるめて、あしげにしてやる。

私はこう決意したから、お前は歩けるのだから、こんな福が残っているかわからないゴミ山に頼るより、自分の脚で福を掴みにいったらどうだと叱り付けて、ゴミ袋を廊下にごん投げてやった。これでこいつはどうするもんか、何かしたら返り討ちにしてやると心中で意気込んだ。ところがマチカネフクキタルは予想に反して、ちよつと考えるとそれもそうですねと納得してしまつたから、私は肩透かしに拍子抜けて何も云えなくなつた。

あとでフジキセキ聞いたら、どうやらこいつは本当にあのゴミ山を幸運の山だと思つていて、寮でも何度か問題になつていたのでと云う。最近はそうでもなくなつていたらしいが、それでも溜め込んでいるのは問題だつたから、あつさり手放したのは、きつと私に何か思うところがあつたんだろうねと付け加えた。やはり中央のウマ娘はどこかおかしい、良くも悪くも濃すぎてめまいがする。私はこんな訳のわからない奴らと、これから一緒にやつて行けるのかといささか自信を傷めた。

片付けには思いの外時間を食つた。窓を見ればもう黒々とした空がある。

マチカネフクキタルに手伝ってもらいながら荷解きを終えると、フジキセキが「今日はいろいろあつて疲れただろう。ベッドは私たちが整えておくから、お風呂にはいっておいで」と風呂道具一式を持つてきた。さすがに長旅で疲れていたので、この厚意には素直に甘えることにした。

湯壺はタイル張りで、十五畳敷くらいの広さに作つてあつた。十人が浸かつてもまだ余るほど大きかつたが、時間が時間だけに誰もいない。こんな広い風呂を独り占めできるなら、片付けに苦勞した甲斐があつたというものだ。

だだっ広い風呂にざぶりと飛び込むと、我知らずにほうと長い息が出た。湯は普通よりも熱かつたが、疲れた骨身にはこれくらいが丁度良い。湯に疲れが溶けていくようで、まったく良い気持ちだ。

頭に赤手拭いを乗せて上機嫌にいと、いつの間に來たのか牛みたいな乳をしたウマ娘が、湯にどばどば水を足している。先にはいつている私に断りもなしとは見上げた度胸だ。ちよつとばかり脅かしてやろうと悪戯心に、やいお前風呂つてのはこれくらい熱いのが丁度良いのだぞと云つたら、この牛女はヒンと情けない悲鳴を上げて、過剰なまでにすみませんと謝つてきた。何だか悪者になつたみたいで堪らない。

あんまりに謝つてくるので、いやこちらこそ怒つて悪かつたと改めて私から水を足してやつたら、今度は物珍しそうに私をじろじろ眺めてくる。きつと見ない顔だと気が付いたんだろう。引つ込んでいた悪戯心がむくむくしたので、そのほかにかい胸をめがけて掬すくつた水をかけてやつた。期待通りまたヒンと鳴く。愉快である十分に温ぬるくなつた湯に牛女を押し込み、お前名は何と云うのだと聞いたら、メイシヨウドトウですうと弱々しく間延びした声で名乗つた。その名前には聞き覚えがあつたので、すると君もしかしてあのメイシヨウドトウかと聞き返したが、やはり「あのかは、わかりませんけれどお……メイシヨウドトウは私ですよお」と云う。私は有名な奴以外は中央のウマ娘に詳しくないのだが、メイシヨウドトウの名前は知つている。故郷にいた時にテイエムオペラオーのことを調べたら、必ず二着の欄にこいつの名前があつた。こいつは模擬レースで無敗というあいつに唯一食い下がり、よくよく僅差にまで迫る実力者なのだ。

そんな奴を相手にこれは申し訳ないことをした。慌てて先の非礼を詫びさせてほしいと頭を下げると、メイシヨウドトウは気にしていないと首を横に振つて許してくれた。胸と同じくらい心が広い奴である。それに柔らかいに違いない。感心したら胸は関係ないですと強めの語気で返された。何だかこれ以上は良くなさそうなのでそれもそうかと頷いておいた。

メイショウドトウとは風呂の中でいくつか話をしたのだが、あいにくメイショウドトウのほうでは、うまい具合にこっちの調子に乗ってくれない。何を云つてもえうとかはうとかぎりで、こちらのご機嫌を窺うように俯き加減で私の顔を見てばかりいる。しかもやけに小さく構えて、困った顔までする。二着ばかりで自信を無くしたのかとも思ったが、にしちゃあまりにも気弱な態度だ。

何をそんなおどおどすることがある。お前は十分強いのだが、堂々とすればよろしいと云うと、メイショウドトウはほとんど泣きそうな声で「私なんかダメダメですよ」としきりに自分を貶めて否定した。滅多なことは云うもんじゃないぜと励ましてみたが、そんなことないですと首を振るどころか、頭まで抱え始めるから焼け石に水だ。自虐するにしてもいい加減をするもんだが、こいつにはその加減つてものがないらしい。

どれだけ云つても聞きいれやしないから、云つてるうちに腹立たしくなってきたしまいにはとうとう我慢できず、お前は強いと云うのに己を卑下してばかりで、とんと失礼な奴だ。そんなだからテイムオペラオーに勝てぬのだと懇々説教じみた真似をしてしまった。

これは自分でもらしからぬことをしたと思う。故郷では乱暴者のじゃやウマ娘で通っていた私が、偉そうに他人に説教なんて烏滸がましいにもほどがある。だが、実力があるのにこうも己を卑下するこいつの性分が、どうしても私には許せなかった。何としてでも正して、こいつにこいつ自身を認めさせてやりたかった。もしかしたら私は、こいつの気弱が白毛の友人と被って、放って置けなかつたのやもしれぬ。

説教を受けたメイショウドトウは、最初こそしきりに委縮してベそを掻きそうになつていたが、聞いてるうちにだんだん不思議に顔を染めていった。説教を終えた時にはどうしてそこまで私を褒めるんですかと眼を真ん丸にして聞くので、私はレース場で見ただあのサイレンスズカを引き合いに出して、模擬とはいえ中央のレースで二着を取れるお前の実力を疑えないのだと伝えてやった。

するとメイショウドトウはいたく感激した様子で「あなたは……善いひとですなあちよつとデリカシーが足りないですけど」とふにやふにや笑う。デリカシーがあるかは知らんが私がデカシリーなのは確かなので、うん尻のかさには自信があるぞと尻を叩いて返した。今度はくすりともしなかつた。遺憾である。

風呂から上がった部屋に戻ると、マチカネフクキタルがベッドの上で胡坐をかいて、ふんにやかだかはんにかかだかと云いながら、水晶玉を前に妙なことをしている。何をやっているのか聞けば、明日の天気を占っているのですと云うから閉口した。天気予報を見れば済むことまで占うなどもはや病気である。きつとこいつは占い病に罹っているに違いない。

くだらないから、すぐ寝た。歯を磨いたら、白い寝巻に着替えて、掛け布団を跳ねのけて、とんと尻持を突いて仰向けになった。そしたら旅の疲れからか、すぐに眠くなったから、足をうんと延ばしてから眼を閉じた。

ここに来てから魂消てばかりである。思い返せばまったく大変な一日であった、今日だけでこの調子では明日には死んでいるかも知れない。天国に行ったあいつは元気だろうか。寂しがつちやあないだろうか。また会いたいもんだ。寝入る直前に、そんなことを思った。

起き抜け一番に牛乳を飲むのが、私の昔からの日課である。しかしこの冷蔵庫にあつたのは豆乳であつた。無調整で、豆臭くつて、飲めたものではない。牛乳はなののかとマチカネフクキタルに聞けば「昨日のラツキーアイテムが豆乳だつたので！」と笑顔で仰るから心底げんなりした。朝から先が思いやられる。今日が私の命日かもしれない。

いよいよ授業へ出た。

初めて教室にはいつた時は、何でも大変だつた。自己紹介をしながら、スベと別けられた私はここでやっていけるのかと思つた。生徒はやかましい。図抜けた声でやれどこから来ただとか、やれ地方はどうだとか、とにかく質問をぶつけられて、てんてこ舞いになった。隅にいたメイショウドトウに眼で助けを求めたが、顔をそらされて無視された。この借りはいつか返させてもらおう。

私は卑怯なウマ娘ではない。臆病なウマ娘でもないが、惜しいことに思慮に欠けている。田舎者だからなおさらだ。最初のうちはおかしなことを云つてやしないが、変に畏まってしまった。しかし別段受け答えには嫌な顔をされなかつた。教師に云われて自分の席に着いたら、後ろのテイエムオペラオーがどうだいと聞いた。うん善い奴らばかりだと単簡に返事をしたらテイエムオペラオーは安心したらしかつた。午前はつつがなく聞き流した。今更座学に苦心するほど私の頭は不出来ではないただ四限目の終わりがけに先生が、選抜レースに向けて午後は模擬レースをするから、昼食は軽めにしなさいと云うので冷や汗を流した。授業に出て初日から中央の奴らと走れとは、中央の教師も無理な注文をする。少しはこつちの了見も汲んで、心の準備をする時間くらいくれてもよさそうなものだが、どうも都会人というのはむやみにせっかちな質らしい。

まあ決まってしまったものはしかたがない。いくら文句を云つたつて変わるわけでもないし、悩んでくさくさするのもそれは億劫だ。まずは腹ごしらえをして備えるのが良かろう。おい飯に行こうとメイショウドトウに声をかけると、昨日に引き

続き恐縮して「わ、私なんか、一緒にいいんですか？」と吃驚する。いいも何も私はお前だから誘ったんだぞと返したら、こいつはしきりに「あ、ありがとうございませう……！」とまた恐縮して席を立った。

メイショウドトウが私の横に来ると、反対側にはテイエムオペラオーが来た。お前も一緒に来るかと聞けばもちろんと云う。霸王を自称しているくせに友好的な奴だ、きつとこいつの国は外交が上手に違いない。

食堂に行くと、今日は蕎麦そばがあると貼り出されていた。私は蕎麦が大好きである。小さい頃は夏になると、ばあちゃんがよく蕎麦を作って、私に食わせてくれた。ばあちゃんは私が十になったら死んでしまったが、今でも蕎麦を見るとばあちゃんの顔を思い出して、心底食いたくなる。

券売機に行くと、貼り紙通り蕎麦がある。天麩羅蕎麦だ。すぐにこれの大盛を選んで受付に持って行ったら、ばかにでかいかき揚げの乗った蕎麦を渡された。見るからに美味そうである。かき揚げもあと乗せて私好みだ。早速ふたりと席に着いて蕎麦を啜ったが、やはり見た目通りに美味かったのでお代わりした。

空になったどんぶりを重ねて置いたら、テイエムオペラオーが君も存外健啖家じゃないかハハハと云う。メイショウドトウも重なったどんぶりを見てたくさん食べられて、うらやましいですと云った。蕎麦のお代わりで健啖家なんか、スベの食い気に比べたら私なんぞはまだ常識の範疇だろう。それをふたりに話したら、まさかオグリ先輩じゃあるまいしと笑った。そのまさかを目の当たりにした時の、こいつらの反応が楽しみである。

スベの話をしていると、呼び寄せられたか当の本人が来た。昨日ぶりにあったスベは私の所へ来るなり、随分とはしゃいだ様子でサイレンススズカさんと同部屋だったんだよと報告してきたから、そいつは良かったじゃないかと一緒に喜んでやった。無論、心中ではまったく面白くない。あんな大逃げをかます奴が真面まじめなはずもないから、きつと今にあいつはバ脚を現すぞと思った。この予想は半分当たりであった。

ひとしきり喜んだあとには、ふたりを紹介した。どちらも気の良い友達だと云えば、テイエムオペラオーはボクらは運命に導かれし盟友のさと得意になって笑いメイショウドトウは私なんかが友達なんてとまたまた恐縮する。質もまったく反対

でよっぽど濃い奴らだが、私にとってはこちらに来て初めてできた友達だ。

私はこれだがお前はどうかだと聞くと、スベも新しい友達ができたと背後にいる奴らを紹介してきた。それぞれエルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、キングヘイロー、そしてハルウララの五人である。常々スベには人誑たらしの才能があると思っていたが、こいつは中央でも通用する魔性らしい。

これはどうも、私の妹分が世話になったようだと挨拶すると、ハルウララが真っ先に話しかけてきた。こいつは底抜けに元気でとにかく気持ちの良い、小さい頃のスベみたいな奴だ。頭のほうは然程よろしくないようだが、それがまた愛嬌あじょうになっていて愛らしく思えてくる。スベの人誑たらしに慣れた私ですら、ついつい可愛がってしまいそうになるから、こいつの魔性は侮れん。

続けて話しかけてきたのは、エルコンドルパサーである。訛りの強い喋り方をする帰国子女で、妙なマスクを着けていた。君そのマスクはいつも着けているのかと聞けば、当たり前のように年中着けているんだそうだ。妙な病気もあった者である。当人の説明では、このマスクは父から受け継いだ大切なものだから着けているそうだが、そんな大切なものを毎日身に着ける必要はなからう。後生大事に筆筒にでもしまっておけばよろしい。

グラスワンダーはいかにも淑女然とした見た目だが、眼がぴくりとも笑っていないのが恐ろしい。こいつはきつと鎌倉武士の生まれ変わりに違いないと考えていれば、やはりそうであつたのか、急に殺気が飛んできたから思わず尻尾が逆立った。そのくせ表立つてはお淑やかに振る舞って、握手まで求めてくるからまつたくとんでもない。何をそんなに熱り立つことがあるのか聞けば、いえいえ何でもありませんよと答える。嘘つきやあがつた。だが藪を突いて罫を出すのはごめんだ。

キングヘイローはいやに高慢ちきで、やかましくいろいろ云ってきた。大概このような輩は付き合うとむかつ腹が立つもんだが、しかし何故かこいつからは嫌味を感じぬ。察するにどうもこいつは口も態度もでかいが、見栄っ張りなだけで踏ん返り返るのは苦手と見えた。お前は高慢ちきを気取ってるが、性根はずいぶんと優しいようだなと指摘してやれば、凶星だったか顔を真っ赤にして、魚めいて口を開閉する。「もう少しこう、何と云いますか。手心と云いますか」と齒切れ悪くグラスワンダーが呟いていたが、何のことかはついぞわからなかった。

ここまで濃い奴らばかりだったが最後にきたセイウンスカイは、いかにも要領の良い悪戯娘と云うべき面構えで、この中ではこいつが一番怖い奴だと思った。やあやあ君がスベちゃんの幼馴染だねと握手を求めて来たが、ゆるりとした半眼の奥でこちらを値踏みしている。しかし次に瞬きした時には、すっかり色が変わって昼行燈にしているのだから、まったく油断ならぬ。雲ゆえの気まぐれさとは当人の談であるが、こいつは雲は雲でも積乱雲であろう。本気になったこれとは、レースで一緒になりたくないもんだ。

挨拶が済んだら、改めてみんなで席に着いて飯を食った。スベが相変わらず白飯を山盛りに行っているの、それじゃあ食ってる最中におかすが足りなくなるぞと指摘してやったのだが、一同から「違う、そうじゃない」と何故か私が突っ込まれてしまった。解せぬ。

そのうち四杯目の蕎麦を平らげると、セイウンスカイが興味津々に、ふたりはどうしてこの時期に転入してきたのと聞くので、死んだあいつとの約束を果たすためにここに来たのだと、白毛の友人のことを、自慢するみたいに話してやった。

私が話し終わると、誰ともなく口を噤んだ。スベもあいつのことを思い出したが、箸を止めて眉尻を下げている。どうも余計なことまで話してしまつたらしい。これだから配慮が足りんと云われるのだ。

せつかくの飯だというのに湿っぽくしてしまつたので、これは申し訳ないとぼつを悪くしていたら、テイムオペラオーが急に「君のアリアにボクが泣いたー」とわからぬことを云う。アリアは何だと首が傾ぐが、おかげで空気がからりとしたのは事実だから、まったく機微に鋭い奴である。私はこいつに一先勝てそうにない。

飯を食い終えて教室に戻ると、十分後に芝二〇〇〇メートルのコースに集合せよと云うので、体操着に着替えてコースにいる。

初めて踏みしめた中央の芝は、思っていたよりも固く刺々しい。北海道はその気候から寒さに強く柔らかい洋芝が主流だが、中央は暖かいため野芝が主流になっている。ゆえに北海道から出てきたウマ娘は、まず芝の違いで躓くものだと話に聞いていたが、なるほど確かにこれは慣れるまで苦勞するだろう。私はこの芝でスベが躓かないか、少しばかり心配になった。

踵で芝を踏んづけていたら、テイムオペラオーが走れそうかいと聞いた。うん

と云ったが、少しばかり走るのが不安になっていたから、中央の芝は踏み心地が悪いなどと云ってやった。テイエムオペラオーは妙な顔をしていたが、すぐに合点がいったのかハハハと笑って、何君なら大丈夫さと頷いた。こいつに云われると、本当に大丈夫な気がしてくるから不思議である。

しばらくすると教師がゲートと一緒にやってきて、今日の模擬レースはゲート訓練もするからそのつもりでと云う。途端に、大半の生徒がこの世の終わりみたいな悲鳴を上げた。ウマ娘は本能的に閉所を嫌うので、とにかくゲートが苦手という奴が多い。座学よりよっぽど嫌だから逃げる奴もいる。察するに模擬レースは、これを行うための口実らしかった。

なお、私は小学校の頃に、いつも仕置きとして、薄暗くて、狭い物置に閉じ込められたりしたから平気だが、これは何の自慢にもならぬ。

五十音に走り初めたから、少しすると私の番が来た。模擬レースとはいえ本気である。ここに来て初めてのレースが黒星じゃあ格好がつかない。模擬レースだろうが何だろうが、やるからには勝つ気でなきやならん。中央の奴らに田舎者は所詮田舎者だとナメられちゃあ名折れだ。私は両頬を叩いて気合をいれると、ゲートにはいった

腰を落として構えると、数秒後にはパツとゲートが開いた。私はみんなに半歩ほど遅れて、ゆらりと飛び出した。九人がバ群を成して先に行くので、見ていた周りが転人生が出遅れたぞと囁したが、生憎とこちらの脚質は、生粋のパワーを活かした追い込みである。最後尾からの開始で、何ら問題はない。

レースであるが、私の番では逃げを得意とする者がいなかったのか、全体で見ればゆつたりとした流れになった。見た眼では多くが先行として前を走り、ふたりほどが差しの位置にいる。この調子で行くならば、最終直線にはいる六〇〇メートル付近でレースが動くことになるだろう。

この展開は、慣れない芝の感触を確認しながら走る私にとって非常に有利なものだった。走り難くあるが、ここまで緩々とした進みならば、仕掛けの時期まで十分に脚を溜められる。また芝二〇〇メートルの距離は皐月賞、秋天皇賞、秋華賞、大坂杯など多くのG1で採用されている距離であり、展開の予測もしやすいから、別段掛かることもなくレースを運べたのも、有利のひとつだ。

一〇〇〇メートル付近で最終曲線の手前まで来ると、私はぐんと脚に力を込めて加速して、大外からバ郡を横切った。すると、差しの奴らが速度を上げて前に出始めた。想定よりもずっと早い私の仕掛けと、転入生である私への危惧によって、このままの位置だと差しきれないかもしれないと焦燥に駆られていた。

そして、この焦燥は伝播する。

差しの位置が上がるのを見た前の奴らは、眼を見開いて速度を上げた。ここで追いつかれては差し切られると思ひ、むやみに溜めた脚を使って差を開けようという魂胆だった。そうなると当然、差しの奴らもまた速度を上げて追いつこうとする。私が出が下がつても止まらない。追いつき追い越し、気付けば誰もが必要以上の速度を出していた。

スパート地点を過ぎて四〇〇メートルまで来ると、バ群のスピードが落ちてきた私の策に嵌って、もう脚が残っていないのだ。一方で人知れず速度を落として息を詰めていた私は、まだまだ余裕の表情で集団の後ろにある。ここで先頭を捉えたかには、抜かねば無作法というものだ。溜めていた脚の残りを使って集団を横切り、その勢いのまま一バ身差で抜けてやった。

列に戻ると、みんなが矢継ぎ早に持て囃してきたから得意になった。田舎者だが脚だけは都会者には負けんのだと胸を張ると、テイエムオペラオーが「さすがボクのゾフィーだ」とまた意味の通じないことを仰る。褒めてることはわかるが、ゾフィーは何だ。私はウルトラマンじゃない。とりあえず光線のポーズで返したら、メイシヨウドトウが変に失笑した。私たちのやり取りがおかしかったらしい。笑いのツボがわからん奴だ。

話していたらテイエムオペラオーの番が来たので、メイシヨウドトウと一緒に傍からレースを眺めていたが、こいつの走りはやはり圧倒的であった。始めから終わりまで脚運びは隙無く激み無く、恐れ知らずにバ群を突つ切る末脚の使い方には感動すら覚える。小細工も何もない、ただただ強い走りだ。さすが模擬レース無敗の肩書きは伊達ではない。私もこうありたいもんだと思った。

帰ってきたテイエムオペラオーが、ボクの輝きに見惚れたかいと聞くので、素直にお前は凄い奴だと答えた。そうしたら「そうだろうとも！　ボクという存在は太陽に等しいのだからね！」と嫌味も謙遜もなく威張るから、こいつは嫌いになれな

い。

次に走ったメイショウドトウもこれまた圧倒的である。何せテイエムオペラオーに食い下がることのできるのだから、さすがに同級生でも頭ひとつ抜きん出た実力者だ。立派な奴である。帰ってきたメイショウドトウにいくつか称賛を伝えたが、相変わらずうじうじと己を卑下して取り合わなかった。まったくこいつの気弱も筋金入りである。

しかし友人二人からこうも実力を見せつけられては、俄然として心に火が灯る。私はまだまだ未熟で、ふたりに比べればちつとも強くない。けれども負けん気だけは人、もといウマ一倍に強いつもりだ。元より私があれば劣っているなど、ここに来る前からわかっていたことだ。それでいて気持ちでも負けていては、ダービーでも勝てずに終わってしまう。少なくとも、こいつらと競り合えるくらいでなければ私たちの夢は叶わなだろう。

精神的に向上心のない者は、ばかだ。

己の退路を断つために、今はお前らを抜かすことを目標にしてやると宣言すればテイエムオペラオーは哄笑でこれに答え、メイショウドトウが私が目標なんて恐れ多いですとへどもどして首を振る。並大抵では勝てぬだろう。しかし勝てぬ勝てぬと諦めて努力をしないではますます勝てぬ。

一度こうと決めた私は頑固だ、精々後ろには覚悟するが良い。私は鎌爪を研ぐみたいない気持ちで、ふたりの背中にそう呟いた。

参

はれて放課後である。

登校初日にして模擬レースをするなんて濃い一日を過ごしたから、私はもう気疲れして机に突っ伏していた。そしたらテイエムオペラオーが来て、君このあと時間はあるかいと聞いた。来て初日に用事なんてあるもんか。あつたらこうまで無為に過ごしてはいない。首を振って見せれば、間髪入れずにじゃあ一緒に来たまえと云う。なんでも自分が所属しているチームリギルとやらの採用試験があるから、私に是非ともこれに出て欲しいと云うのだ。

リギルと云えばこいつや駄洒落皇帝殿みたいなのがいる、この学校でも一等強いと噂のチームだ。そんな所の試験を受けたって、今の私じゃあ見向きもされんだろう。しかしテイエムオペラオーはそう思っていないようにで「君ならばきつと合格できるさ、何せボクが見込んだウマ娘なのだから」と仰る。皮肉めいて王様は下々を使うのが上手いこつてと肩をすくめたのだが「ボクを抜くと宣言したんだ。これくらいはできて当然だろう？」と返されてしまったから私の負けである。口の上手い奴め、そこまで云うなら受けて立とうではないか。

そういうことになったが、メイシヨウドトウも一緒に来るかと聞いたが、すでにチームにはいつているからそちらに行くと言う。そういうことならばしかたがないそそくさしているメイシヨウドトウに別れを告げて、私は運動着に着替えるために更衣室へ向かった。

テイエムオペラオーに尾いて練習用のコースに来たが、もううじゃうじゃと運動着の奴らが集まっている。すでに十人はくだらんほど居るから、このリギルというチームの人数が見て取れた。しかし狭き門目当てによく集まる。すごい数だが、ここから何人選ばれるのかとテイエムオペラオーに聞けば、たったの一人と云うから魂消た。狭いにしてもずいぶんだ。格式高いにしてもいやにケチケチしている。近くに立っているトレーナーもいかにもできる女みたいなのが恰好をしていて、何だか高慢ちきと見える。私はこの時からこのトレーナーに女狐と云う渾名をつけてやった。

集まった奴らはどんなもんかと眺めていたら、昼間に見た顔が並んでいるのを見つけたんで、昼間ぶりだなと声をかけた。まず不安な顔をしていたスベが、すぐに顔を綻ばせて駆け寄ってくる。

何が不安か聞いてみれば、サイレンススズカがいるこのチームにはいれるか心配らしい。しょうのない奴だ。ここで気後れしていたら勝てないから、私の胸を借りるつもりで走れと励ましてやった。

対照的にハルウララは自信満々だ。よっぽど調子が良いのか気合も十分で、私の前に来るとめいっぱいに胸を張って「今日は私、受かりそうな気がするんだ！ 受かってても恨まないでね！」なんてやけに強気な態度まで見せてくる。そっちこそ恨みっこなしだぜと云えば、にっかりと笑うから、なかなか底知れん奴だと思った。

話しているうちに、キングヘイローもやってきた。こいつも同じように自信満々にふんぞり返って「勝つのはこのキングよ！」と負けん気を見せてきたから、王様だつて負けてやらないぞと私もふんぞり返した。こいつもこいつで随分な自信がある怖い奴だ、強敵として目星を着けておくべき相手だろう。

私たちのように騒ぐ奴らがいる一方で、静かにしている奴もいる。エルコンドルパサーは特に集中している様子で、ほとんど瞑想に近い状態でそこに立っていた。出会った感じからして騒いでいそうな奴だったが、どうもこのリギルの採用試験には殊更真剣である。乱すのは嫌だったので声はかけなかったが、一番に警戒するべき相手で相違ない。

そのうち受付で名前を書けと云うので一筆認めた。受付にはグラスワンダーが立っていて、来る奴来る奴に頑張って下さいねと声をかけていた。みんなは威勢よく返事していたが、私まで一樣に返事をするのも何だかつまらないんで、私だけは、今にお前と同じ場所に立ってやるぜと煽ってやった。グラスワンダーはにっこり笑って、あら楽しみにしていますと答えた。口調に反して怖いくらいに眼が笑っていないかった。こいつも大概、負けん気が強い奴である。

受付のすぐ近くにはリギルの奴らもいて、こちらをじろじろ眺めている。しかしこの中には、スベの云うサイレンススズカの姿が見当たらないから、私はおやと思つた。どこか別の所にいるのかもしれないが、あいつがいないのは残念だ。もし来ていたら、スベは私のもんだと文句のひとつでも云ってやったのだが、いないならど

うしようもない。

全員が女狐の前で列になると、今度はひとりずつ決意表明をしろと云うので、並んでた奴らが順に何か宣言していた。ところで、スペが日本一のウマ娘になりたいと云った途端に、周りが失笑をこぼしたから腹が立った。

決意表明の場で月並みのことしか云えないくせに、他者の夢を笑うとはまったく不愉快な奴らだ。大きな面で、都会者の自分は偉いもんだと勘違いしていやがる。でかい街に住んで、余計な知識を溜め込んでいるから、そうやって誰かの夢を笑うんだらう。憐れな奴らだ。子供の頃から都会の煤けた空気がかり吸っているから、いやにひねっこびた、可愛げのない小人が出来るんだ。

私はこんな腐った了見の奴らと走るのは胸糞が悪いから、自分の番になった時に大声で、「ダービーで勝って、オグリキャップのような日本一のウマ娘になることです。つきましてはまず、親友の夢を笑ったこの腑抜けどもには負けんように走ります」と宣言してやった。

皆が呆気にと取られて、眼をぱちぱちさせた。しかし次には射殺さんばかりにこちらを睨みつけて来たから、めいっばい胸を張って、悠々と悪童らしく笑みを見せた。私は口も所作も上品とは云えないが、心はこいつらよりも遥かに気高いつもりだから親友の夢を笑われておめおめ黙っているなどできんし、ましてや、誰かの夢をこいつらのように嘲り笑うこともできん。

こんな奴らには、決して負けるつもりはない。ここで負けては私とスペの顔にかかわる。道産子は意気地がないと云われるのは残念だ。右も左もわからぬうちに都会っ子に笑われて、何も云い返せなくって、仕方ないから泣き寝入りしたと思われちゃあ一生の名折れだ。

改めて恥知らずなお前らにや負けんぞと宣言すると、女狐に私語は慎めと咎められたので、云われた通り黙って、べっかんこうをして見せてやった。そしたら、遠くでテイエムオペラオーの笑い声が聞こえた。王様はこの見せ物にご満悦のようだった。

決意表明が終わればついに出走である。評価の基準はタイムと試合運びの良し悪しで、ただ一着になれば良い訳ではないと女狐は前置きしたが、結局の所は勝たねば話にならないのは変わりない。素直に一着を目指せと云えば良いものを、中央の

トレーナーになるといやに曲がりくねった言葉を使うもんだ。

私はスベ、エルコンドルパサー、キングヘイロー、ハルウララと共に最終走八人に当てがわれた。始まるまではみんなと一緒にいたから何も云われなかったのだが、ゲートにはいると、途端に両隣の奴らが田舎者の癖に調子に乗るなど喚き始めた。仲間が近くにいたら悪口のひとつも云えない癖に、私がひとりになったらすぐ強気に喚いて、ほとほと見下げた奴らだ。

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

親切に注意してやったが、誰も黙ろうとしない。他の奴らも口には出さないが、内心は似たり寄ったりだろう。けちな奴らだ。ちよつと煽られたくらいでいきり立って、そんな茹蛸ゆでだこみたいな面をしてウマ娘と云われるか。ついには女狐にそれ以上は失格にすると脅されて、それで渋々引き下がるのだから聞拔けた。

騒ぎも済んで各バの体勢が整うと、開始の合図でゲートが開く。スタートは少しばらつき、展開は縦長になった。エルコンドルパサーとキングヘイローは先行、スベは差しの位置にあり、最後尾は私とハルウララである。逃げがひとりいるのか進みは模擬レースよりも早くあつたが、この程度で追っつけなくなるほど私の脚は柔ではない。

見た所、どんどんハナを進む先頭——こいつはゲートで私に文句を云ってきた奴だ——は得意になつていようだが、進み具合からしても掛かり気味だ。あれは半分も持たんだろうなと予想立てれば、案の定一〇〇〇メートルを過ぎた辺りで後ろへ垂れてきた。思いがつているから意気地もないし、考えもない。立派なのは減らず口だけか、この程度なら小細工を労するまでもない。

コーナーを進んでいくと、途中でスベが加速したので私も合わせて前に出た。バ群を外から抜いてキングヘイローまで迫ると、焦つたように脚を回し始めた。ここで脚を使つては、ゴールまで持たないだろう。私はキングヘイローに見切りをつけると、コーナーを抜けて先頭のエルコンドルパサーの背中をとらえた。

仕掛けるならば今しかない。力任せに芝を踏みしめて一気に飛び出すと、そのままの勢いでエルコンドルパサーの背中を追い越し、私は先頭に躍り出た。しかし私が出れば当然スベも前に出てくる。エルコンドルパサーも負けじと前に出る。キングヘイローもいるが、脚が残っていないのか上がつてこない。

並走のまま二〇〇メートルまで来た。ここまで来て負けるものかと私は脚を踏ん張って、わずかに飛び出した。ハナ差である。スベも負けないと叫んで地面を蹴った。これもハナ差である。エルコンドルパサーも雄叫びを上げて脚を回す。追いつけ追い越せのままで、もつれ込むように私たちはゴールラインを踏み越えた。

ほとんど同時のゴールとなれば、これは写真での判定になるだろうが、試合でもないからここにはそんなものはない。正確な着差がわからぬ以上、決めるのは女狐の裁量ひとつになる。私たちはぜえぜえ云いあいながら、いつたい誰を選ばれるのかと、怖い顔をさらに怖くして悩んでいる女狐を見守っていた。

しばらくして、最後尾のハルウララがゴールするのを合図に、女狐が判決を下した。

「エルコンドルパサー、来なさい」

私は女狐の発したこの言葉を、愕然とした気持ちで受け止めた。そして、にわかに湧き上がってきたエルコンドルパサーを憎らしく思う気持ちを、歯を食いしばって無理矢理に呑み下した。

どれだけ納得がいかなくとも負けは負けである。まだ芝に慣れていなかったとか、模擬レースをした直後だったとか、思いつく限りに云い訳したって結果は覆らない。潔く認めなくつちやあ卑怯者だ。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、私は涙を堪えているスベの頭を撫でて、まったく中央は強いな。来た甲斐があつたじやないかと豪快に笑い飛ばしてやった。それで少しは元気を取り戻したか、スベは次は負けないと意気込んで顔を上げた。涙は、呑み込んだようである。

女狐と話を済ませたエルコンドルパサーはまず「エルの勝ちデース！」と勝ち誇ると、それから「ふたりとも強かつたデス。正直、ちよつと負けるかもと思つて、ヒヤツとしました」と真剣な顔をして私たちに握手を求めてきたから、私もスベも次はヒヤツとじやあ済まさないぞと云つて応えてやった。

私たちから一バ身ほど遅れてゴールしたキングヘイローは、悔しさの滲んだ瞳でこちらを睨みつけると「次は負けない！絶対に貴女たちを追い越して、私の背中を拝ませて見せるわ！」と指差して云つてきたから、お前は負けん気もキング並みだなと誉めてやった。

最後尾でゴールしたハルウララは、まだ地面に倒れこんで疲れたと叫んでいたが
お前も頑張ったじゃないかと手を差し伸べると、すぐに満面の笑顔を見せてくれた
始まる前に見せたあの自信は、いったい何だったのかと云う鈍^{のろま}間な走りだったが、
こいつなりに全力で走り切ったことは、ちゃんと誉めてしかるべきだろう。
みんなで健闘を称えあっていると、やおらとテイエムオペラオーがやってきたか
ら前に立った。

「いやあ、まいった。恰好悪いったらない」

アハハと先んじてお道化だが、テイエムオペラオーは笑わない。むしろ真面目な
顔までして「悔しいかい」と聞くから、私ははつきりとこう答えた。

「あんな大口叩いて負けたんだから、死ぬほど悔しいに決まっている。私が負けたか
ら、スベの名誉も、あいつの名誉も守れなかった。こんなに恥ずかしいことはない、
今すぐに腹をきりたいくらいだ。だが、くやしいから恥ずかしいからとまげを認め
るのは、それこそ負けいぬのすることだ。このてい度で挫けるほどわたしはよわく
ないんだ。すぐにおいついてやる」



テイエムオペラオーは何と思つたのか、しばらくじつと私の眼を見つめていたが「しかし、目尻に涙が滲んでいるよ」と指摘した。なるほど、何だか妙に視界がぼやけるはずである。その上鼻の奥がつんとして息が上手くできないから、もしかしたら酷い顔をしているに相違ない。

私は袖で目元を拭いながら、レースにいくら負けたつて、流した涙は私の糧になるんだから、お前に追い付くのに差し支えはないと答えた。

テイエムオペラオーは驚いたあとに笑いながら、それでこそボクのライバルだよと私の肩を叩いて誉めてくれた。実を云うと、負けたことだけが悔しくて泣いたのではない。こいつの期待に応えられなかったのが、一番悔しかったから、私は泣いたのだ。

こうして私と同世代たちとの対決は、黒星から始まった。本気で走つて負けるのが、ここまで悔しいものだとは知つたのは、この日が最初であった。

便所で鏡を見ると、見るに堪えない顔があつた。迂闊に涙まで見せてしまつて、まつたく情けないことだ。私はお姉ちゃんだから、そんな簡単に泣いては示しが付かないのに、こう涙を見せてちゃ台無しだ。これからは今まで以上に、気を引き締めないきややつていけないだろう。

冷水で顔を洗つてしっかりと反省してから寮に戻ると、マチカネフクキタルが突然泣きついてきた。あんまりにも必死なものだから、いったいどうしたと話を聞いてみれば、何でも所属しているチームから数がつそり減つて、今やたつたふたりしかいなくなつてしまつた。このままだとチームが潰れてなくなつてしまうのだと云う。

聞くにいち大事だ。チームによつほど悪いことでも起こつたのかと思つたが、続きを聞くと、チームの柱だつたかの芦毛の怪物オグリキャップが、担当のトレーナーと一緒に競争ウマ娘を引退して、チームを抜けてしまつた結果、オグリキャップ目当ての奴らまでみんなチームを抜けてしまつたと云うから、私はどうも言葉に困つた。

この調子だけはひと一倍に良い同居人が、オグリキャップのいたチームに所属していたのに驚いたのもあるが、肝心のチームが潰れかけているのは魂消た。オグリ

キャップの名声に眼が眩んだ奴らもだが、碌な選別もせず誰彼構わずチームにされるトレーナーも悪い。有名になればなるほど、お零れに与りたい奴や、威光を笠に着たい奴が出るのは必定である。それをふるいにもかけず、来る奴来る奴をむやみにチームに入れてちや、こうなっても世話ない。それでいて、責任は全部後任に任せようならなんて、前のトレーナーは随分な不埒者だ。せつかくああまで頑張ったのに、これではオグリキャップも報われないだろう。

「チームにはいつてくさい！ お願います！ 何でもしますから！」

五体投地する勢いで頼み込むマチカネフクキタルには、いつそ憐れみの情さえ覚えたとはいえ、情に流されてふたつ返事でチームにはいつて、こいつみたいに痛い思いをするのは間抜けなことだ。いくらはいつてくれと云われたつて、さっきの話を聞いたあとで素直に頷けるもんか。オグリキャップがいるならともかく、いないなら猶更だ。

私がそんな簡単には決められない。もう少し待つてくれと云うと、マチカネフクキタルはいつそ頭を下げて、何とかはいつてほしいと縋つてきた。よつほど私にはいつてほしいようだが、そんな安易に頷けるもんか。それから、私たちの間にこんな問答が起こった。

「まだ他のチームも見えない。すぐにはいるなんてのは無理だ」

「チームの危機なんですよ！ 後生ですから助けてください！」

「危機つたつて、すぐ潰れるんじゃない、大抵大丈夫だろう」

「全つつつつ然！ 大丈夫じゃないですよ！ はやくメンバーを集めないと、潰れちゃうんですから！」

「五人なんかすぐじゃないか。正門で呼びかけてりや、すぐ集まる」

「集まらないからこうして頼んでるんじゃないですかあ！」

何を云つてもほとんど悲鳴に近い声を上げる。相当に切羽詰まっているようで、私もいい加減こいつが可哀そうになつてきた。

しようがないので渋々折れて、詳細がわからんことには判断もできんから、まずはチームの部屋に案内してくれと云つたら、マチカネフクキタルはいやあ頼んでみるものですねと露骨に胸を撫で下ろした。呆れた。もう私がいっただ気でないやがる。

着替えもしないまま寮を出て、上機嫌なマチカネフクキタルに尾いて行くと、学園の隅っこにある立派な建物に案内された。玄関も立派なものを構えている。これがシリウスのチーム部屋だそうだ。チームの部屋つてのはみんなこんな豪華なのかと聞くと、よっぽど有名でもない限りはほつたて小屋みたいな所になると返つてきた。このチームはオグリキャップが居たから、ここまで部屋がデカくなったそうだ。

オグリキャップの活躍でこんな部屋がもらえるなら、リギルも負けないくらい立派な部屋を貰つていそうで、負けたのがまた悔しくなってくる。あそこにはいれていたらダービーもぐつと近付いたろうに、まったく口惜しい。

玄関に立つと、どうですか立派なものでしょうと聞かれたから、張りぼてにしちやあ立派だぜと返した。マチカネフクキタルは「もう！張りぼてじゃありません！」と憤慨したが、この建物には仕事を引き継いだ後任のトレーナーを含めて、三人しか所属していないのだから、やはり張りぼてだろう。

木でできた玄関戸を開けると、五〇畳くらいを仕切りで分けて、整えた広間があった。私は生まれてからこんな立派な家にはいったことはない。こんな広間であのオグリキャップが過ごしていたというから、有名人つてのはすごいものだ。

最初にいっとう広い部屋に通された。でかい革張りのソファと、本やら書類挟みやらが平積みされた机があつて、壁には賞状だとか盾だとかが額縁にいれられて飾られていた。これが全部オグリキャップの功績の証だと思つと、まったく壮観で頭の下がる思いだ。

お上りらしくきよろきよろしていたら、何故かメイシヨウドトウがどんよりとした泣面をして、部屋の隅っこで苔むしているのに気が付いたから魂消た。お前何してるんだと聞けば、しくしくしながら、ここに所属しているんですと云う。ますます魂消た。そういうえばチームにはいつていると云つていたが、それがよもやこのシリウスであつたとは、奇妙な縁もあつたものだ。

さつと見てさつと帰ろうかと思つていたが、この気弱がメンバーにいるならば、まあ多少は見ても良いかとなる。あとはトレーナーがどんな奴かだが、これとすぐに判明した。いつの間やら傍を離れていたマチカネフクキタルが、何とも草臥れた様子の性悪そうな女を連れて来たのである。

リギルの女狐が厭味つたらしいでできる女だとすれば、こいつは干物か何かだろう

スーツを着てはいるが、着崩れしてはいてだらしがない。不機嫌に垂れた眼の下には青黒い隈取が目立つ。長い髪に至っては、私ですらそれなりに手入れをしているのに、こいつは手入れすらしていないのかえらくばさばさだ。痴漢に女狐と来て、今度は干物と来ちゃあ、いよいよこの学園の行く末が真つ暗だ。子供理事長には早い所真面な人材を見つけてもらいたいものである。

いかにも体調不良な恰好のこいつは、私の姿を見ると破顔一笑してわあよく来てくれたねと歓迎の言葉を吐き、自身を葉隠と名乗った。似合わん名だ、死ぬことすらできん見える。しかし前任の尻拭いをさせられているのは同情する所である。

干物は私の顔をじろじろ見て、君は噂の転入生だねと訊ねてきた。そうだが何かと返すと、フクキタルの云う通りスタミナとパワーはありそうだねと云う。どうやらマチカネフクキタルは、先のリギルで行われたレースを見ていたらしい。他チームの採用試験を盗み見とは、良い度胸である。

とはいえ、考えてみればリギルは有数の強豪チームだ。不合格者の中から、見込みある奴を攫つてこようと考える輩がいてもおかしくはないし、リギルの採用試験ならばちよつくら覗いてみようかと、興味本意で来る奴だっている。シリウスの現状を鑑みれば、誰が観戦に来ることも不思議ではないように思えた。

「それにしても、ウチにはいつてくれるなんてありがたいがとうね」

覚束ない足取りの干物に、私は胡乱な顔をした。そんなつもりで来たのではないと云うと、今度は干物が妙な口をして固まった。私も干物も、お互いの事情が一向にわからない。マチカネフクキタルを見れば、顔を逸らして下手くそな口笛などを吹く。こいつめ、いらん知恵を回しやがった。

こうなるとひと声で断りにくいから、私はちよつと困った。干物は露骨に残念な顔をする。メイショウドトウも潤んだ瞳で救いはないのですかと縋ってくる。元凶のマチカネフクキタルまではいってくださいと抜かしやがるから、世話焼きな性分の私はどうにも心苦しい。悪意がないのが猶更だ。

今よりも速く強くなるためには、きちんとしたトレーナーの指導を受けなければならんから、チームに所属することはとにかく急務である。だが私は、まだこの干物の正体を知らんし、ここがどのような目標のあるチームか説明すら受けていない。はいれと云われても、はいそうですかと急には決められん。

そう云う訳だから今からは無理だと伝えると、メイシヨウドトウとマチカネフクキタルが仲間になつて欲しそうな眼で、はいりませんか、はいりませんかとしきりに勧めてくる。情に訴えりやいいと思つて、ずるいことをする。しかたないので、少なくとも今すぐには無理だと付け足してやつた。そしたら干物はパツと顔を綻ほせて「じゃあ今はお試しで、体験入部つてことでもいいかな」と云うから、まずはそれで手を打とうと答えた。練習への参加は、私用のメニューを組む準備があるとかで、明日からということになった。

何だかマチカネフクキタルに遣り込められたかもわからぬが、決めたのは私自身の意思である。こいつらの捨てられた仔犬のような視線に負けた訳では、断じてない。

断じて、ない。

肆

早朝の走り込みを終えて部屋に帰ると、マチカネフクキタルの機嫌が有頂天であった。朝っぱらから何を騒いでいるのか聞けば、テレビの星座占いで一位だったと云うので、くだらないから二度寝した。授業には危うく遅刻するところであった。

昼になってすぐ、トレーナー室に怒鳴り込んだ。何故そんなむやみをしたか問われれば、昼時になってスベに会うと、何やら酷く不安げにしていたのが原因である。

食堂で昨日のようにみんなで飯を食っていると、スベがやたら溜め息を吐く。昨日の負けを引き摺っているにしては、色の具合が深刻で放つてはおけない。そんなに溜め息を吐いて、いったいどうしたと聞けば、スピカというチームにはいつた途端一週間後にデビューすることになったと云うから、そんなばかな話があるかと閉口した。

元から中央に居たのならばともかく、我らはここに来て一週間と経っていない。こちらの勝手もわからぬ上に、このターフを走つたのだった昨日が初めてだ。それを承知で今からすぐデビューさせようなど、性急も性急で気狂いの判断だ。正気ではない。いったい誰の差し金だと詳細を問いたさせば、どうやらここへ来た時分にレース場で痴漢を働いた、あの沖野が主犯であるらしい。

あれの下にスベがいるという事実のほうがよっぽど心配だと思つたが、それよりもまず、こんな判断を下した沖野の真意を確かめるのが先決であろう。ひとつ文句も云つてやらねば気が済まんので、私はみんなの制止も聞かずに、大股でトレーナーの集まる部屋に殴り込みをかけてやつた。

部屋にはいるなり奴の姿が眼についたので、いかにも軽薄そうなその顔に向かつて「やいお前、こいつはいったいどういう見だ」と問い質した。近くには女狐もいて、急なことに心底驚いていたが、今回はお呼びでない。邪魔しないでいたごう。

沖野はまず「まあ落ち着け。そんなに凄まじく落ち着いて話も出来ないだろう」とまるで私が来るのを予想してたみたい毅然として云う。私はすこぶる冷静だと返してやつたら、後ろからセイウンスカイがどこが冷静なのさよばいたから

これをだまらっしやいと一喝した。

「なんでデビューなんか、一週間後に決めた」

「そりや、あいつなら問題ないと思つたからな。上がり三ハロンで三三秒六、走つたあとの息のはいりも早い。デビュー前とは思えない仕上がりがだ。これなら今すぐにデビューしたつて勝てる」

沖野はこう反論した。やに得意でいやがる。上がりが何だか知らないが、とにかくこつちに来てから、たつた一週間でデビュー戦を走らせるのはあんまりだ。私は腹が立つたから、沖野をとつちめるつもりで詰め寄つた。

「スベはまだこつちの芝にも慣れないんだぞ」

「確かに札幌とは違うが、タイムは平均以上に出てる。一週間もみっちり鍛えりや、デビュー戦くらい簡単に勝てるさ。俺だつていろいろ考えてんだぞ？」

「いろいろたどんな考えだ。笹棒^{べらぼう}め。スベの脚を無断で触る奸物^{かんぶつ}の考えなんぞ、何聞いたつて信用できるもんか」

「ちよ、だから誤解だつてそれは！……とにかく、とにかくだ。お前さんがスベシャルウィークのことを、ものすつごく心配してるのはわかつたからさ……だからほら、そろそろ昼休みも終わるぞ？ みんなのところに戻りなつて」

「利いた風なことをぬかすな。屁理屈ばかりで、男らしくもない」

「云われてるわよ」

「おハナさんも見てないで助けてくんない!？」

談判も堂々巡りで埒が明かない。沖野は授業に遅れる前に早く帰れと急かすが、私は納得できないまままで終わらせるつもりはないから、授業をすつぽかしてまでいるつもりだった。小賢しいだけの阿漕^{あこ}な大人に、スベを任せてたまるもんか。

私は口をへの字に曲げると、沖野を思いつきり睨めつて、再度この邪智暴虐なトレーナーに、今度はもつと強い口調で問い質した。するとこいつは心底困つたように、お前さんの怒りはもつともだが、来る前にちゃんとスベの意見は聞いたかと問い返して来たから、私の攻勢が崩れた。そういえば事の詳細を聞いたばかりで、スベがどのような考えを持っているかは聞いていない。だがスベの不安の遠因がこいつであることはわかる。誤魔化そうたつてそうはいかない。

そうやつてふたりで押し問答をしているうち、スベがもう我慢ならないと飛び出

して来て「私は大丈夫だから」と云う。「大丈夫なもんか、そんな顔で」と答えたなら「不安でも、自分で決めたことだから」と云った。スベにそんなことを云われては、私もこれ以上はうるさくできない。こいつがこんな強いことを云うとは思わなかった。

わずかばかりの敗北感に苛まれつつも、お前はそれで良いのかとスベに聞けば、スピカに所属すると決めたのは自分の意思だから、不安は不安だけれどデビューすることに不満はない。沖野の決定にも不服はないし、むしろ望むところだとまで云う。

思わず、スベと沖野の顔を見比べる。一方はかける言葉もないと首を振り、もう片方は何とも云えぬ苦笑いを浮かべてこちらを見ている。

つまるところ、碌すつぽ聞きもせず判断した私が、早とちりの勘違いをしただけだった。

気付いた途端に居た堪れない空気が漂い始めたので、私は芝居掛かって姿勢を正し沖野に向き直ると、いやあお騒がせして申し訳なかった。妹分のスベが大事なものでと謝罪して面目を保とうとした。

しかし後ろのキングヘイローが、いやそれで誤魔化すのは無理でしょと云つて来たから、私はあえなくここで撃沈となった

親譲りの無鉄砲で損ばかりしている。今も昔もそこは変わらぬ

己の恥晒しにぐぬぬと歯噛みしていると、スベが真剣な顔をして私の名を呼んだ何かあるかとそちらに向き直ると、数秒の間を置いてから「ダービーで待ってる」と宣言布告して来たから、眼をまん丸に見開いた。

私とスベの目指す所は同じである。ダービーとは生涯に一度しか出られないレースだから、ここひとつしかない席を争うのは得策でない。どっちかが負けて、どっちかが勝つてじゃあ、天国にいるあいっだって気持ち良く祝えないだろう。

だがスベはそうは思わないと首を振り、「私はお姉ちゃんとお戦いたい。どっちが強いのか、あの大舞台で白黒決めたい。私がずっと追いかけてきた背中に、追いつきたい」と凛平な顔で云う。ここまで云われては、私も逃げる訳にはいかない。覚悟には覚悟で報いねば、ウマ娘の名が廃るといふものだ。

右の拳を突き出してダービーの座は譲らんと宣言してやると、スベは右の拳をぶ

つけて、私だつて負けてやらないからと強気に笑つた。

騒がせて済まなかつたと謝罪をして、トレーナー室を出るところで、お前シリウスにはいつたんだろと沖野は私に聞いた。そうだと返したら、沖野も女狐も安心したような心配したような、いまいちわからない顔をして、シリウスのことをよろしく頼むとそれぞれの言葉で云つた。新人に向かつて随分と妙なことを云うものだが頼まれたからにはやるから任せておけと答えておいた。ふたりはそれに頷きぐりであつた。

ひと悶着も済んだあと、放課後になつて教室を出ると、フジキセキから会長が呼んでいたよと伝えられたから、生徒会室に向かつた。

部屋にはいるなりいつたい何用ですかと一番に聞けば、シンポリドルフはうむと頷き「学園の施設案内がまだだろう。こちらで案内役として、メジロマックイーンを用意したから、彼女と学園をひと通り見て回つてくれ」と云つて、傍に居るお嬢様然とした芦毛のウマ娘を指した。

メジロマックイーンはスカートの裾を摘まみ上げて「ご紹介に与りました、メジロマックイーンですわ」と貴族めいた礼をして見せる。メジロと云えば良家で有名な所だから、同じ学生身分の奴にもこんな仰々しいことをするんだろう。ずっとこんな調子で居られたら、堅苦しくつて蕁麻疹じんましんが出てしまふそうだ。

「メジロマックイーン。学園には、質実剛健を成すための施設がめじろおしだ。転入生の彼女を、くまなく案内してやつてくれ」

「畏まりましたわ」

駄洒落がうまく決まつたシンポリドルフは、すこぶる得意顔で私を見た。ダシにされたメジロマックイーンは、気づいていないのか恭しく頷いた。エアグルーヴも似たようなもので、真面目腐つたまま何も云わないでいる。大いに面倒臭い。しようがないから「目白押しだからメジロマックイーンを推したんですね」と云つてやつたら、すぐ駄洒落皇帝の耳がピンと尖がつた。メジロマックイーンはまあと感心した様子である。エアグルーヴも慌てて、さすがお上手ですだのと云つて持ち上げ始めた。駄洒落皇帝も罪なウマ娘だ。

何だか居辛くなつたので、学園を回つてきますとメジロマックイーンを連れて、生徒会室を出た。あとはどうなつたか知らない。後日エアグルーヴから茶葉が送ら

れてきたから、それなりの所に落ち着いたようである。

中央の施設は、確かに駄洒落皇帝の云う通り、地方と違って十分以上の設備が揃っているが、もっぱら生徒が使う施設というのは、存外にも限られている。敷地の半分がコースなのだから当然なのだが、やはり拍子抜けと云うのが正直な感想であった。

最初に案内された図書室は、故郷のそれに比べてもかなり大きく、街の書店にも負けないくらいであった。本棚はいろは順で種類分けされており、市井で売っている一般的な本から、レースに関する資料までが詰まっている。併設された映像室には、貴重な過去のレース映像などが保管されており、申請すれば誰でも映像を見られるそうだ。図書室にしちやあ随分な施設だ。

「貴女は、目標にしているレースはありますか」

「目標なら、ダービーだ」

「でしたら、ここで過去のダービーについて、お勉強すると良いでしょう。会長の真似になりますが、温故知新、過去の情報から学び、現状と照らし合わせて対策や傾向を掴んでおけば、きつと助けになりますわ」

なるほど一理ある。お嬢様はお嬢様として、高尚な教育を感じさせる物云いだ。しかし会長の真似と云うなら、駄洒落も云わにやならんだろうに。それを伝えたら、メジロマックイーンは困った顔で、いいえ私は遠慮しておきますわと首を振った。賢明である。

次には室内プールに行った。ここは授業で使うのではなく、生徒が自主練習を行うためにあると云う。スタミナの鍛錬にはよく使われるそうだが、泳げない私には一生縁のない場所になる。メジロマックイーンはそれ用の補助具もありますよと板を持ってきたが、こんな平べったい板切れひとつで人が泳げるようになるものか。浮かかも怪しいもんだ。

忌々しいプールから離れると、次はカフェテリアに来た。ここは食堂とは違い、有料で軽食や甘味を食べられる場所で、学園と提携している飲食関係の企業が運営しているそうだ。ここ以外にもいくつかあるようで、また別の企業が運営しているらしい。三食以外でものを飲み食いたいならば、ここを使えということらしい。持ち帰りができる物もあるから、購買としても機能しているようだった。

メジロマックイーンはお品書きを指して、「あれがここで一番のおすすめスイーツですわ!」と傍目にも豪華な薦めてきたが、見ればお値段も相応に高い。案内が終わったら一緒に食べましょうと無理を仰るので、薄っぺらい財布を見せて、寒い時代だとは思わんかと云うと、でしたらお近づきの印にといかにも品の良い財布を見せて云った。金持ちらしく太っ腹だが、初対面の奴に気安く奢るのはよろしくない。こいつが将来、悪い男に騙されなにか心配である。

最初こそやりにくくて苦手な奴だと思っていたメジロマックイーンだが、話してみるとこれが存外にも気さくな奴なので、そうでもなくなった。名門の出であるが、こいつ自身はそれを誇りと思つていても、地位に胡座をかいて驕つていないから気持ちが良い。友達にするにや申し分ない奴だと思つた。

気持ちが良いと云えば、中庭にある大樹のウロに、日頃の鬱憤を叫ぶ風習がこの学園にはあるらしい。都会には妙な風習もあったものだが、試しに先日負けに付いて叫んでみれば中々に気持ちが良いからばかにできぬ。

ひと通り叫んでさっぱりしていると、随分な大声ですわねとマックイーンが驚いているから、尻のでかさとの声のでかさには自信があるのだと返した。しかしこれを「まあ、女子がはしたないですわよ」とお淑やかに窘められたのは、初めての経験であった。良家のお嬢様はお堅いらしい。

施設を回り終えたので、約束通りカフェテリアで休憩を取ることにした。私がパフェを頼んでいる間に、メジロマックイーンはずつと菓子類の欄と睨めっこをしている。どちらも一歩も譲らん熾烈な争いだ、千日手と見える。

何をそこまで悩んでいるのかと聞けば、太りやすい体質だからパフェ以外にも食べたらキツめの鍛錬をしなければならぬので、それで悩んでいるのだと云う。もうパフェを頼んでいるのに、他にも何か食おうとは、呆れた食意地を張っている。夕食がはいらなくなつたらどうする気だろう。

それにしても難儀な身体をしてる。好きにももの食えないとは可哀そうだと憐れむと、そう云う貴女はどうなんですと剣呑に聞かれたので、菓子類は嫌いじゃないがほとんど食わないからわからないと答えた。そうしたら、宇宙人を見るような眼で見えてきたから失敬だ。菓子類はスベと白毛の友人にみんな分け与えていたから、そうむやみに食う習慣がないだけである。

散々悩んだ末に紅茶だけを頼んでいたが、その割には明日から練習量を増やさねばと嘆いているから滑稽だ。頼んでもからも悩むならば、さつさと頼めば良からうと云ってやると、「そういう問題ではないのです！」といきり立って、菓子類がいかに素晴らしいかというお講義を始めたから疲弊した。いかにもお嬢様然とした淑女と思っていたが、こいつはとんでもない癖ウマ娘である。どうしてこの学園の奴ら也是这样濃いのだ。真面なのは私だけか。

結局この日は、寮に帰ってからも消灯直前までマックイーンのお談義に付き合わされたので、しばらく菓子類を見るだけであいつの顔が思い浮かぶようになってしまった。あまりにも手酷い仕打ちだ。さすがに許せぬ。

腹が立ったので、風呂場で頭を洗い流していたこいつに、ずっとシャンプーをかける悪戯をして、仕返しをしてやった。流しても流しても一向に落ちぬ泡に惑乱して「私の頭が石鹸になってしまいましたわ!」と間拔けな悲鳴をあげる姿には、溜飲が下がる思いであった。

次の日は放課後には、メイショウドトウと一緒にシリウスの部屋へ行った。部屋では、マチカネフクキタルが水晶玉に向かっている。何をしているのだと問えば、シリウスの行く末を占っているのですと云うからくだらない。メイショウドトウに占いの相手を任せて、私はさつさと干物がいるらしい奥の部屋に向かった。

部屋にはいると、まず山脈のように畳み上がった書類の束が見えた。見た目通り片付けもできないかと呆れたが、見ていくとこれはどうも事情が違った。

目についた山から一枚手に取ると、かなり前の、まだオグリキャップが居た頃の決算書類のようで、数字やら何やらがびっしりと書かれている。他の紙はどうかと見れば、これもまた昔のもので、雑誌のインタビューに関する報告だとか、グッズ販売の契約に関する何やらがあった。これらの書類の裏には、隠すようにして、エナジードリンクの空き壺やら空き缶が転がっている。

察するに、人手が足りなくて書類の片付けがうまくいっていないのだろう。なかなか真つ黒な環境である。トレセン学園には、労基法が存在しないのかもしれない。

山を崩さぬように奥のほうへ進んでいくと、干物が見るも無残な死人の顔色をし

て、うつらうつら舟を漕いでいる。おいおい大丈夫かと声をかけると、干物はアツと頓狂な声を上げて飛び起きた。それから私を見つけると、何事もなかったように笑って「来たね。約束通り、君用のメニュー考えておいたよ」と傍にあつた書類挟みを渡した。

中身を見ると、足腰のパネを鍛える練習と、それによつて得られるであろう効果までが、紙を跨いでまで連なっている。しかもそれが、一週間分のすべてに書かれているのだから、私は本当にこいつが作ったのかと疑った。よつぽど心配になる有様で、こんな真面目なものが作れるとは思えなかった。

これでも故郷では、トレーナーの真似事なんかをしていた身だ。個人に適した練習を考える難しさは知っているつもりだ。それをこんなふらふらしている奴が、考えられるはずがない。誰かに考えてもらったのを、そのまま渡したに違いない。

「こいつはどういう了見で作った」

「フクキタルがね、最後の競り合いで負けたつて云うから。きつと瞬発力が足りなかったんだと思つたんだ。それに、貴女の走りをちゃんと見てないから、こんなのかできなくて」

「私は自慢じゃないが、足腰は強いほうだぞ」

「うん、でも札幌から来たなら、こつちの芝にはまだ慣れてないでしょ。だからまずは、慣れてもらうほうが良いかなつて」

「確かにこつちの芝は、固くて走りにくいが、走つていりやあそのうち慣れる」

「でも、それで変な癖が付いたら大変だよ。直すのにも時間がかかるし、何より怪我の元になる。……怪我は、してほしくないから」

「笹棒め、私がそんなへマするもんか。しかしこの問答で、こいつがちゃんと理屈を考えているのはわかつた。」

「その有様で、そこまで考えたのか」

「うん、まあトレーナーですから」と何でもないふうな答えが返つて来たが、机に積まれた書類束の奥に隠してあるエナジードリンクの残骸を、私はしかと目撃している。

「見上げた根性だ。仮の奴に、ここまですることもないだろう」

「そんなことないよ。私はね、貴女の夢をフクキタルから聞かされた時——自分で聞

いてもいないのに、わかった風に云つてごめんね——に、全力で手助けしたいと思つたんだ。友達と同じ夢を掲げて、オグリの背中を追いかけて走るっていう貴女の夢が、いつか報われてほしいから」

「そうか。しかし、何でもダービーを目指す奴なんざ他にもいるぞ」

「うん。でも私は、君に会つて、やっぱり君しかいないと感じたの。うまく説明するのは、難しいけれど……燃えるような覚悟の籠つた瞳が、私には、何よりも奇麗に見えた。だから君に手を伸ばしたんだよ」

なるほどこいつは、見た目こそ干物だができる奴だと見直した。会つて一日しか経つていない上に、まだ所属すら決めていない私のことを、こうまで真剣に考えてくれていたことから、こいつのウマ娘に対する愛情はこと深いと理解できる。死ぬことすらできん、というのは訂正すべきだろう。

だが、こんな仮入部の奴を相手に無理をするようでは、こいつを心底から信頼しようとは思わん。大方崩れかけたチームのために、今までほとんど寝ずに働いていたのだろうが、それで己が壊れてしまつては元も子もなかるう。命も身体もひとつしかないのだから、大事に使ってもらいたい。健康とはかけがえない物だ。何かあつてからでは取り返すには遅く、幸せ悪くしてからでは死ぬことしかできん。こいつには、そんなつてほしくない。

私は書類挟みをほつぱり出して、お前の考えはわかつたがそれで無理するのは通らんと叱り飛ばして、干物を仮眠室にぶち込んでやった。運んでいる時に何か騒いでいたが、貴様がしつかり寝るまでは練習はせんと叱れば、すつかり大人しくなつた。変な意地を張らずに、最初からそうしていればよろしい。

放置していたふたりの元に戻ると、エコエコアザラシ、エコエコオットセイと云いながら地面を転がるなど、箒の真似事をしていた。そりやいつたい何の儀式だとか聞けば、占いの結果が悪かつたから開運祈願をしているのだと云うから、呆れるのもばからしくなる。難有ありがたくつて涙が出てくらあ。

私はふたりを立たせて、そんなことをしている暇があつたら手伝えと、部室の片付けに駆り出した。書類やらなにやらで煩雑としているこの部屋を、このまま放置しておくわけにはいかん。部屋が汚いのは不健康の極まりだ、病の元はさつさと根絶やしにするに限る。

三人で手分けして要る物と要らない物に分けてから、箒と雑巾で手当たり次第に掃除して綺麗にしてやった。メイショウドトウのヘマも少なく、一時間も経てば部屋はすっかり片づいて、元の奇麗で広々とした部屋に戻すことができた。

片付けが終わったら、今度は台所に連れ出した。シリウスの部屋は、さすがオグリキャップがいただけあって、食事に関する設備が充実している。聞くに大将、食堂で飯を食ったあとに、こつちでも飯を食つてたらしい。よくよく健啖家だ、部費の半分が食費に消えていたという逸話も頷ける。

冷蔵庫の中を覗くと、少ないがいくらか食材が残つてたので、これらを使って簡単に野菜炒めなどの料理を作った。こいつは干物が起きた時に食う分だ。あの様子では碌な飯すら食っていないに相違ないから、わざわざ手ずから作つてやったのだ。スベと白毛の友人にしか食わしたことがない、私の手料理を食えるとは、干物もなかなか幸運な奴である。

料理の後片付けをしていると、料理できたんですねとフクキタルが失礼なことを云うから、乙女の嗜みであると返しておいた。やんちゃ盛りの時分、花嫁修行させれば少しは大人しくなるかと無理やりやらされた料理だが、存外役に立つからわからぬものだ。

干物の様子を見に行くと、静かに寢息を立てている。相当深く寝入っているようだったから、少しばかり安心した。これで起きていたら、どうして寝かしつけてくれようかと思っていた所である。

作った飯を冷蔵庫にいたら、最後に、干物の枕元に明日にまた来るから、それまでにしつかりと休んでおけという旨の書き置きを残して部屋を出た。メイショウドトウとマチカネフクキタルがやたら笑顔でいるので、少しばかり居心地悪くなったが、どうせこれが日常になるのだから些細なことである。

伍

今朝の走り込みから帰ると、マチカネフクキタルが着替えている最中だった。はいつた途端に、潰れた蛙みたいな悲鳴を上げるものだから、私は心底魂消て、こいつは申し訳ないと謝って戸を閉めた。あとになって考えれば、女同士なのだから、肌を見られたくらいでそう悲鳴を上げなくても、よさそうなものだ。ただ、右膝にサポーターを着けていたのは、少しばかり気になった。おそらくは、右膝を怪我しているのだろう。もしかしたらあいつは、これを見られたくなかったのやもしれん。

昼になっていつもの奴らと飯を食っている時、私もいよいよチームにはいつたから事を始めるぞと宣言した。真つ先にテイエムオペラオーが、素晴らしいと云って拍手をする。ハルウララも両手を上げてすごいすごいと喜ぶので、私は調子に乗って、役者めいて立ち上がりお辞儀をして返してやった。

ところへグラスワンダーが、デビュはいいつ頃ですかと聞くから、なるべく早くにするつもりだと云って座り直した。そうしたらキングヘイローがホホホと笑ってデビュ戦が決まったらこのキングが直々に見に行つてあげるわとふんぞり返った。まったく素直じゃない奴である。お嬢様はお嬢様でも、先日に出つたメジロマックイーンとは大違いだ。しかしこいつのおかげで、みんながスベと、私のデビュ戦を見に来てくれることになったから、この高飛車もばかにならない。さすがキングと誉めてやりたいところだ。

放課後になってシリウスの部屋に行つたら、昨日と比べて随分と良くなった干物が、昨日はありがとうねとお礼を云ってきた。別に、目の前の不養生な奴を放つて置けなかつただけだと答えたら、ツンデレだと云われた。余計なお世話だ。

それから、私のデビュ時期について、干物と打合せをした。いつぐらいが良いかと聞かから、一週間かそこらが良いと云つたら、干物はそれはいきなりで急だよと渋った。しかしスベが一週間でデビュするのだから、私だつてそれくらいでデビュできない道理はない。お姉ちゃんが妹分に負けてちゃあ、それこそ情けな

いつてもんだらう。

この談判は、結局干物が先に折れたことで決着が付いた。干物も私の強情には勝てないと見たか、じゃあそれでメニューを調整しておくよと頷いたので、私も最初からそうしていれば良いのだと返した。

談判が終わったとなれば、次はさつそく練習である。干物というのは要領がいささか悪い。何でもかんでも書いておかなきゃ忘れるし、その癖に書類の整理だってろくにできた試しがないから、すぐそこらじゅうに紙束を散らかしてしまふ。その上に不器用で、料理も裁縫もうまくできなかった試しがないと云うから、干物は根っから干物である。

だが指示は立派でわかりやすく、ちゃんとトレーナー然としていたから、私も練習がしやすかった。悪いと云うなら気弱な態度くらいなものだ。要領も悪ければ器用でもないから、てんで声に自信がない。しつかりしてれば多少は様になるのだが、干物にそれを求めるのは酷だらう。

一度、私の走り方を干物に見てもらおうと、今のままだと危ないから、まずはフォームを矯正すると云うので、正しい姿勢で走るように訓練することになった。干物曰く、私の走り方は上半身の使い方が未熟で、下半身に十分に力が伝わっておらず、せつかくの瞬発力が大きく削がれているらしい。このままでは怪我の原因にもなる。すぐにも修正しなければならぬから、最初に姿勢の矯正を行うという理屈である。

この練習にはマチカネフクキタルが付いて、いろいろと手本を見せてくれたのだが、それが思う以上に参考になったから魂消た。

普段は占いがどうだとむやみに喚くだけの騒がしい奴だが、ひと度コースを走れば、先達として抜きんでた実力を持つてることがわかる。菊花賞ウマ娘だと聞かされていたが、なるほどこいつは納得の走りをする。

特に驚異と思つたのは、圧倒的な加速力だった。何せ傍から見てもわかるほどに速度が変わるのだから、こいつの末脚にはいつそ恐怖すら覚えた。最初は脚を溜めるためにゆつたりとしているのだが、スパートにはいると脚の回転数が劇的に増加する。その上で、腕はまっすぐ後ろに引き、身体も左右へのぶれもない。

姿勢はフクキタルを手本にしろとは干物の言葉だが、こんなものを見せられては

領く他にない。正直に云ってしまえば、あの素晴らしい切れ味には憧れた。目指すならばこのような末脚になりたいものだ。しかしそれを云うと調子に乗るに決まっているので、こいつには教えてやらない。

姿勢の調整をしたあとには、メイシヨウドトウとシャトルランで併走したが、まったくもって立派なものだ。私は音に尾いて行けず、最後まで走り切るのはできなかったのだが、メイシヨウドトウはひいひい云いながらも、最後まで走り切っていた。こいつも身体の使い方が上手くて、脚だけで走っていないのが見てわかるが、それ以上に諦めの悪さに驚いた。テイエムオペラオーに食らいつけるのも、この気弱の下に隠された根性があるゆえなのだろう。姿勢の矯正が終わったら、また挑戦してみたいところである。

すべての練習を終えて身体を休めていると、干物がどうだったと聞いてくる。私がつくづく私は恵まれている。何せ、ここに来てから高い壁ばかり目の前にあるんだ、こいつあ登り甲斐があつて大変良い」と答えたら、君の向上心の高さには度肝を抜かれるよと心底感心した顔をされた。

こうして、正式にシリウスの所属になると、私は干物の下で練習を続けた。練習の質はすこぶる良い。故郷にいた頃の、みんなであれこれと云いながら考えていたものよりも、ずっと濃^{こま}やかで負荷の強い練習は、私の体力を容赦なく奪った。終わるともうくたくたのへとへとで、風呂にはいるのも億劫になった。だがその分だけ走り方も改善されて、強くなっているという実感があつた。

さすがに本場は何もかも違うもんだ。器具も施設も質の良いものばかりで、まったく地方と中央の格差を思い知らされる。これじゃあ、向こうで一生涯命やつたことが、児童が何かに思えてくる。

そうやってふたりの背を追いかけるように、練習に精を出す日々を続けているとそのうちに、いよいよ一週間経つてスベのデビュー戦の日がきた。光陰矢の如しと云うが、まったくその通りである。

朝、いつもの奴らと正門前で集合した。先に待っていたグラスワンダーとキングヘイローのところに行くと、ちよつとだけ変な者を見るような眼をする。どうしたのかと首を傾げたら、私を指して服が良くないと失敬なことを云った。花柄のシャツと、青い柄物のズボンのどが悪い。お袋のお下がりの、濃緑のコートも着けてバ

ランスも良いだろう。しかし他の奴らも集まってくるなり、その服は良くないと云うから、私も少しばかり不安になった。今度新しく服を買いに行くべきかもしれない。

立ち話も程々にして、デビユー戦の行われる阪神レース場へと向かう。この時に、私は初めて東海道新幹線とやりに乗ったのだが、切符があんまり高いものだから、眼玉が飛び出るほど魂消た。たかだか電車に乗るのに一万円で、往復となれば二万円も飛ぶ。ぼったくりもい所だ。足元の見方が尊大も尊大で、客をなめ腐っているしかし都会者はこれを恐れもなく買う。よっぽど辛抱が利かない、せっかちな質だから、値段なんか気にしちやいないだろう。贅沢なことだ。私なんか、故郷ではいつも下等に乗っていた質だから、切符程度にこんな大金を払うのはもう苦の字である。これも金がかかるくらいなら、干物にたかつておけばよかった。

前よりも格段に薄くなった財布を見て、私がしくしく悲しくしていると、見かねたキングヘイローが今回だけよと云って、帰りの電車賃を出してくれた。いくら文無しだからって、こんな大金奢られちゃあさすがに悪いと断つたのだが、貧乏人は貧乏人らしく施しを受けなさいと云って聞かない。しまいには、無理矢理に万札を握らせてくる。王様 ^{貴族の} *noblesse oblige* ^{義務} の精神が備わっていると見える、高貴なものだ。ここまでされてなお断るのは良くないから、ひとつ借しとして受け取っておくことにした。でかい借しだ、今年中に払えるかわからん。

新幹線に乗り込むと、電車なのに飛行機みたいな車内をしている。座席はやけにふかふかとしていて、長く座っていても尻が痛くならない。よっぽど走り出したら、車内販売までが来た。こうなるとほとんど飛行機だ。せっかくなので試しにアイスを買ってみたが、これがむやみに固くって匙がはいらない。無理に刺して匙を壊しても堪らん。散々困った末に、こいつはどうして食うんだと隣席のメイシヨウドトウに聞いたら、何故か間違えて持ってきたという金属の匙を使って食わせてくれたアイスは美味かったが、エルコンドルパサーに餌付けされてみたいデスねと笑われたのは癪である。

三時間弱も新幹線に揺られて、やっとこさ阪神レース場に着いたが、思いの外大変な人出だから少し驚いた。前走を見ていた客が残っているのかとも思ったが、私たちのように今さつき来た態の客もいる。無名のデビユー戦にしては観客が多

いつてのは、何だか妙な光景だ。

キングヘイローの説によると、新人のうちに推しというのを見つけ、デビューから引退まで追いかけて続ける奇妙な奴らが、この界限にはよくいるそうだ。気に入ればひとりだつてふたりだつて、際限なしに推しを増やすと云うから、変てこな趣味である。テイエムオペラオーは宝塚歌劇団に例えて「新人公演で将来有望なジュンヌを見つけるようなものさ」と説論を加えたが、随分と気の長い考えだと思つた。私には到底やり切れない。

建物にはいつてパドックまで行くと、沖野がいた。周りには運動着を着ているウマ娘がいるから、雑踏の中でもやたら目立っていてわかりやすい。近寄ると沖野はすぐに気が付いて、おうお前らも来たのかと片手を上げた。それで、周りの奴らもリギルだ何だと騒ぎ出したから、いささか衆目を集めてしまった。

スベの調子はどうかと聞いてみると、緊張はしてたが実力はひとつ出ているから力を出し切れれば勝てるよと云つた。沖野は無断でひとの脚を触る変な奴だが、嘘は吐かない男だ。こいつが云うならその通りだろうから、私は頷いてそいつはよろしいと答えた。

沖野と話していたら「貴女がスペシャルウィークさんの云つたお姉ちゃんね」とサイレンスズカが声をかけてきた。いかにも私はスベのお姉ちゃんだが、しかしこいつにお姉ちゃんと呼ばれる筋合いはないので、そうだが私はお前のお姉ちゃんじゃないと云つたら、大いに狼狽してごめんなさいとすぐに頭を下げる。思つたよりも弱そうだ。

ズカ先輩に失礼なと、他の奴が話しかけてくる。このふたりは知らない。誰だと聞けば、ウオツカとダイワスカレットと云うらしい。やはり知らん奴らだ。その癖ああだこうだと騒々しいんで、先輩だか何だか知らんが、私の眼が黒いうちはスベは誰にもやらないと云うと、すぐに短い悲鳴を上げた。私に恐れ入つたと見えて得意になつたが、直後に笑顔で怒っているグラスワンダーが後ろから「ズカさんに失礼をしてはいけませんよ」と肩を掴んできたから、今度は私が恐れ入つて悲鳴を上げた。おかげでサイレンスズカには、たんこぶのできた頭を下げるはめになつた。

ふざけているうちに時間になつた。パドックのランウェイに次々と出走する奴ら

が出てくる。どいつもこいつも緊張した面持ちで動きが固い。大外十四枠で一番最後に出てきたスベに至っては、手と足が一緒に出ている。見てられないんで大声で呼びかけたら、スベときたら、驚いてすつ転んでしまった。まずい具合だ、犬や猫でもあんな動きはすまい。とはいえ、そんな様子も束の間ばかりで収まった。立ち上がったスベは私の姿を見つけると、見つともない姿は晒せないと思っただろう、引き締まった顔をして、堂々とした姿を観客に見せつけていた。

お披露目が終わると、沖野が急に、ゼッケンを渡し忘れたと呟いた。下手な失敗をするものだ。それなら様子を見るついでに届けてこようと云ったら、沖野の奴は私を無視して、サイレンススズカに頼みやがる。腹が立ったから、文句のひとつでも云おうとしたのだが、セイウンスカイに、まあまあここはチームに任せとこうよと抑えられて、口もきけないまま引きはがされてしまった。遺憾も遺憾だが、こう離されちゃしようがない。

出走ウマ娘全員のお披露目が終わったら、準備のために三十分ほど暇になるのでこの間に投票券を買に行った。この投票券というのは、ウイニングライブで良い席を取るための票券である。基本的な買い方は、レースで勝つウマ娘をひとり予想して買う単勝や、三着までにはいる奴を予想する複勝など、難易度によっていろいろな種類がある。票券は大雑把に、的中すれば優先的に前列の席へ、掲示板内ならば中団に、外れたらその券は紙屑になり、物見遊山と同じ後方になる。予想が難しい券を買えば、それだけ優先的に前へ配置される可能性が高くなる仕組みだ。無論人気も券の売れ行きのことになる。

券の金額は購入特典のグッズの有無で別けられており、下限が三千円、上限が六万円となっている。高額であればその分だけ特典のグッズは豪華になる。上手く当れば豪華なグッズが貰える上に、最前列でライブが見られる訳だ。良い御身分の商売だが、こいつは巧い仕組みだ。賭け事でないのが少し惜しい。

今回はデビュー戦なんで、特典グッズ付きはない。あるなら全財産でもつぎ込んだのだが、こればかりは残念だがしょうがない。みんなスベの単勝投票券を買ったら、エルコンドルパサーがせつかくだから屋台の飯を食いたいと云うので、スピカの奴らと一緒に広場で飯を食うことになった。金は沖野が出すと云ったので男を立ててやる意味でも好意に甘んじた。

屋台飯は存外と美味だ。どうせレース場の屋台飯だと思っていたが、食ってみるとこれがなかなか侮りがたい。私は宝塚カレーとやらをカツカレーで頼んだのだが程良い辛さと刺激的な香辛料の風味のおかげで、どんどん胃袋にはいる。カツも厚くて、衣もざくざくして食い応えがある。

みんなのものも食わせて貰ったが、やはりどれも旨いものばかりで、特にテイエムオベラオーの頼んでいたお好み焼きと、エルコンドルパサーの肉かすうどんは美味であった。時間と財布が許すのであれば、もつと頼みたかったくらいであった。

締めに福神漬をぼりぼり食っていたら、少しいいかしらとサイレンスズカが云うので、本当に少しならいいぞと返した。無論冗談なのだが、サイレンスズカは困惑しきりで、言葉に詰まって視線をあちこちに彷徨させたから、わざわざ冗談ですと云う羽目になった。別に背後のグラスワンダーが怖かったのではない。

気を取り直して何用か聞くと、サイレンスズカは言葉を選ぶみたいに、水のはいったコップを握った。

「貴女は、フクキタルと同じチーム……なのよね？」

「そうですが」

「その、フクキタルは元気にしてるかしら」

「うん、すこぶる元気です。毎日うるさいくらいだ」

「怪我はどうかしら。何か、云ってたりした？」

「怪我たなんです、あいつは怪我なんかしてたんですか」

「あつ……云って、ないのね……」

サイレンスズカが云うことには、二年ほど前に、マチカネフクキタルは練習中に右膝を怪我をして、その手術を受けたそうだ。いつだったかあいつの裸を見た時に、右膝にサポーターを巻いていたのを憶えている。あれはやはり、怪我の痕だったらしい。

「もう治っているはずだから、復帰してもおかしくないのだけれど。ちっとも走っている姿を見かけないの。だから、復帰に向けて練習をしているのかさえ私たちにはわからなくて」

「そんなに気になるなら、直接聞きゃいいでしょう」

「聞いたわ。でもフクキタルったら、今度おみくじで大吉が出たら走ります。なんて

はぐらかすの」

こう云ったサイレンススズカの様子に、強い心配の情が見えたので、私はつい親身になった。

「私の練習には付き合ってくれました。まったくすごい末脚だった、菊花賞ウマ娘つてのを信じたくなりましたよ」

「本当に？ それを聞いて、少し安心したわ。あの子、一時期はすごく落ち込んでいたから。シリウスにいるなら、話は聞いたでしょう、後輩がほとんどいなくなつて、チームも潰れそうになつてゐるつて」

「無論です。薄情も極まっています。物見遊山ではいつて、結果も出さずに抜けてちや何でもウマ娘らしくない」

「本当ね……それを思うと、フクキタルは良い子を見つけたわ」

「どうも。しかし、あれが落ち込んでたつてのは、何だか想像できないですね。朝から占いだとうるさくつて、かないません」

「うるさいのは嫌？」

「……………嫌つて訳は、ないですが」

「ふふつ、そう。それは良かった」

「それより、落ち込んでた時期はどうだったんですか」

「そうね……あの時のフクキタルは、とても見ていられなかつたわ。みんないなくなつて、トレーナーの葉隠さんも酷いことを云われて……」

私は、ここで急に干物のことが出てきたから、思わず聞き返した。

「干物にも何かあつたんですか」

「干物？」

「干物というのは、葉隠のことですよ」

「うそでしょ…………？」

「それより、干物がどうかしたんです。随分と気が滅入つていたのは、会つた時から知つてますが」

「ええ、と」

サイレンススズカがわずかに口を開いて、誤魔化すみたいにコップを傾けた。

コップが空になると、サイレンススズカは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「あの

人は、何だか嫌われているみたいだったから」と云った。それはどうしてと聞き返さずにはいられないような云い方であった。

「葉隠さんは、フクキタルのトレーナーになった時はまだ新人で、それなのに、シリウスの……」

「スズカ」

途中で沖野が来た。穏やかに笑っていたが、眼の中は笑っていなかった。私は沖野を初めて怖いと思った。そして、干物に起こった問題というのは、相当に根深いことなのかもしれないも思った。

「悪いな、話遮つちまって。でも本人がいないとこで、そう喋るつてのは……あんまり良くないだろ？」

「……そう、ですね。すみません。貴女にも、ごめんなさい、こんな中途半端に、興味だけ引くような云い方をして」

「構いやしません。どうぞ自分で聞きます」

サイレンススズカの謝罪に、私は首を振つてみせた。委細が気になりはするが、沖野にこう遮られちゃあしかたがない。それに私自身も、本人のいない所でとやかく話すのは、下品だし狡いことだと思っていた。人が隠していそうなことを、又聞きで知った気になるのは、嘔吐きの始まりだ。私は冗談は好きだが嘔吐は嫌いだ。嘔吐きにはなりたくないから、干物が自分で話してくれるまでは、このことはさっぱり忘れて置くことにした。

腹も膨れたら、いよいよゲートインの時間になった。客席からコースを見下ろすと、凜然として佇むスベが見えた。ハルウララが「何だかさつきとふいんきちがうね」と眼を瞬かせたが、見れば確かに、パドックの時よりは随分と様になっている。緊張は残っているようだが、動きに支障が出るほどではなく、むしろちょうど良い塩梅に思えた。

各バがゲートにはいつて、態勢が整うと、ついにレースが始まった。スベの出だしは好調である。いささかの遅れもなく飛び出して、先頭から三バ身ほど後ろの位置で待機した。差しを得意とするスベにしては前にいるが、抑えた様子で掛かりも無い。今日の芝状態は稍重で柔らかく、洋芝で走っていたスベには有利だから、多少は前につけても良いと思っただのかもしれない。

このまま行けばいいなとメイシヨウドトウが呟く。私としても、スベの鎧袖一触に終わるのがもつとも望ましいが、しかしそうは行かぬと後ろから追い上げてくる影がある。こいつは眼帯をしていたので眼帯と呼ぶが、どうも攻めつ気が強いのか、スベに体当たりや土を飛ばすなど、妨害紛いのことはかりをしていたから好かん。しかし実力としては申し分もない走りであり、このレースでは最大の障害であることは間違いない。これに負けるようであれば、ダービーには出走すらできんだろう。

第四コーナーにはいると眼帯が仕掛けた。先頭集団を追い抜きハナを進むが、得意になつているのか、走りに油断が見えたからこいつの負けであると予感した。直線にはいつてスベが仕掛けた。溜めに溜めた脚を解放して一気に駆け上がつて行く声援にも力が籠った。残り二〇〇地点になると、スベがさらに加速して眼帯を抜き去り、そのままの勢いでゴールまで駆け抜けた。

観客がどつと沸いた。みんながスベの活躍を称えて、大きな歓声を上げている。私も嬉しくつて、思わず隣のテイエムオペラオーに抱き着いて、持ち上げながら、やつたぜスベと歓喜の声を上げた。スベは駆け抜けたあと、勝つた実感がなかつたかしばし呆然としていたが、気が付くとすぐに満面の笑みでお辞儀をした。終わつてみれば、危ないレースであった。

レースが終わつたなら、お待ちかねのウイニングライブである。

無論投票券的中させた私たちは、揃つて前列へ案内された。ちょうど正面の一番見やすい位置だった。みんなすでにサイリウムを持って、準備万端である。私もこの日のために自作してきた「スベちゃん♡こつちむいて」「なげチュウちようだい」の団扇を、カバンから取り出して装備した。するとセイウンスカイが「いやほんとスベちゃん大好きだねえ」と抑^{から}揃^かつてきたから、親友なんだから当たり前だろうと云つて、「スベちゃん♡らぶ」の鉢巻を頭に巻いて見せてやつた。しかし今度は全員から閉口された。解せぬ。

そうこうしているうちに、照明が持ち上がりつて紙吹雪が舞う。ステージにも照明が灯る。曲も流れ出して、ついにライブが始まった。

スベのことだから、きつと元気いっばいなライブが見られるんだろうと楽しみにしていたのだが、何故だかライブが始まっても一向に動く気配がない。脇の奴らは歌つて踊っているのに、スベだけが棒立ちで、踊るところか、歌う素振りすらちつと

も見せないから魂消た。すわ大事でもあつたかと心配したが、見た限りでは何かあつた風でもない。スベの奴はどうしたんだろうと云つたら、ハルウラが「スベちゃん、きんちようしてるのかな」と答える。緊張してるにしたつて、ありや何だ。蠟人形でもあるまい。

あとで沖野に聞いたたら、レースのことばかりで、ウイニングライブの練習をすっかり忘れていたと云うから、それでもトレーナーかと、拳骨で沖野の頭をばかりと喰わしてやった。まったくスベにとんだ恥をかかしてくれたもんだ。このケジメはきつちり付けてもらわにや気が済まんので、スベが引退するまでちゃんと面倒を見ることを約束させた。ゴールドシップからツンデレかよと云われたが、これもまた余計なお世話だ。

スベのデビュー戦から一週間経つと、次は私のデビュー戦がある。場所は東京レース場で、第五レース発走であつた。

干物の運転する車でレース場に行くと、スベの時と同じく多くの人で賑わいを見せている。広場には相変わらず、シンボリドルフの着ぐるみがついて、子供たちに風船を配っていた。今日もお勤めで、ご苦労なことだ。こいつは、見れば見るほど、似ても似つかぬ見た目をしている。本人にこの着ぐるみについて、いったいどんな気持ちなのか聞いてみたいもんだ。

控室にはいると、これからついに中央のレースに出るのだという実感が湧いてきて、急に落ち着かない気持ちになった。どうも、柄にもなく緊張しているようだった。全然緊張しない質だというに、今は息苦しくて、胸がいたい。膝まで笑つてくる。今更怖気づいているのか、情けなくなつて涙が出そうだ。

姿見の前で深呼吸を繰り返していたら、マチカネフクキタルが「今日の私は大吉なので運を分けてあげます！」と云つて、勝手に私の右手にお守りとやらを結んできた。このお守りは色彩豊かな手編みの組紐で、俗にミサンガと云うものである。幸運と願いを込めて、私が寝てるうちに夜なべして編んだらしい。

呆気にと取られていると、メイショウドトウも「きつと大丈夫です。頑張ってください」と、私の手を握つて激励してくる。干物まで「まずはレースを楽しんで、走ってきて」と下手くそな笑顔を作つて、私の頭を撫でてきた。気付いたら緊張もそんなに障らなくなつていた。まったく気の利いた奴らだ。今度料理を作つてやることか

あつたら、こいつらの好きなものをたっぷり作つてやる。

すっかり気持ち落ち着くと、係員が私を呼びに来たんで外へ出た。パドックへ行く前には軽い健康診断があつて、体重と、血圧と、簡単な身体の検査を受ける。これは事前に体調を確認して、レース中の故障を減らすためのものだ。

干物によれば、かつてはテンカウントというウマ娘が、レース中の故障によつて右足を切断するまでの、語るに痛ましい事故が起こつたのがきっかけで、このような仕組みができたそうだ。テンカウントぐらいなら昔から知つている。親父がこいつのファンで、よくテンカウントのようなウマ娘になりなさいと聞かされた。今はパラURA委員会の会長をやっているから、テンカウントと云えばそつちのほうが通りも良いかもしれない。

検査で問題なしと診断されたならば、やつとパドックで観客相手にお披露目をする。私は五枠五番なので、ランウェイに上がるのは大概真中だった。初めてランウェイに立つて、高い所に上つたが、何だか変だった。一步一步と進みながら、眼前にたむろするこれらの中から、私のファンになる奴もいるのかと思つた。観客からの視線は突き刺すようで、時々不躰にあれこれと云う。何だか足の裏がむずむずする。

先端まで来ると、私は羽織つていた上着を翻して、他の奴らみたいに格好つけた。長坂橋の張飛みたいに仁王立ちをすると、観客がわあと声を上げる。無論その中にはスベたちの姿もあつたから、私は弱い所は見せられんとめいっばいに笑つて、大いに手を振つて応えた。ひと通りやつたら、もう帰る。ひとり脱ぎ捨てた上着を拾つて、せかせか裏に引き返すのは随分と間の抜けたものだ。

全員がお披露目を終えて、出走の準備も整つたら、いよいよターフに出る。五番のゼッケンを纏つて地下バ道に行くと、途中にティエムオペラオーがいた。どうしたのだと聞けば、私を激励に来たと云う。

「ボクを抜くと云つた君に、是非とも云いたいことがあつてね」

「どうも。それで、云いたいこと何だ」

「君の最高の輝きをボクに見せてくれ。このボクのライバルに相応しい、華々しい舞台を作り上げてくれ！」

この覇王ときたら、巧いこと焚きつけてきやがる。そこまで云われちゃあ引き下

がれない。云われなくても見せてやるさと拳を突き出して宣言したら、テイエムオペラオーは拳をぶつけてこれに応えてくれた。今度こそいつの期待に応えるためにも、このレースは五バ身以上つけて勝つてやることにした。

地下バ道を抜けると、緑に輝く芝と青空が私を出迎えた。ふと白毛に触れて空を見ると、あいつが見てくれているような気がして、最初に控室にはいった時と真逆の意味で落ち着かない気持ちになった。あいつが見守ってくれていると思えば、身体を震わせる緊張も、にわかには気合へ変わる。今なら負ける気もしなかった。

芝の上に行つて、手足を解しながら周りを見ると、似たように緊張した面持ちの奴らがいた。一世一代のデビュー戦とあれば、これに躓くことを恐れていると見える。対して、今の私には恐れもない。レースを楽しんで走る、そのうえで勝つ。今日勝てなければ、明日勝つ。明日勝てなければ、明後日に勝つ。明後日にも勝てないなら、勝つまで続けるだけだ。私はこう決心したから、ゲートの前で無心に身体を解して指示を待っていた。

ゲートインを告げる放送が流れると、私は真つ先にゲートへ飛び込んだ。他の奴らもおずおずゲートにはいるが、ひとりが駄々をこねて、全員のゲート入りが少し遅れた。背後の戸がぱたんと閉じて、数秒後にはついに勝負が始まった。

本レースは芝二〇〇メートルであるが、相変わらず追い込みとして、最後方に待機している。今回は逃げの作戦を取るものがおらず、以前の模擬レースと同じくやや緩慢とした進みだ。バ郡の構成は、先行と差しが半々いる。勝つための小細工を仕掛けても良いが、どうせデビュー戦だ、堂々と勝つてやるのも面白いと思つて、余計な真似はせずにおいた。

第四コーナーにはいったところで、やっと仕掛けに行く。今回の私は、ここからゴールまで一気に走り切るつもりでいた。以前の走り方では、終盤になると足が残つておらず、競り合いになった場合に瞬発力で劣る状態だった。だが、一週間かけて矯正したこの走り方ならば、溜めた脚を使い切らず、余力を残しておけた。干物の云い方を借りるならば、末脚の切れ味が増したのである。そのうえ、リギルの試験と同じ二〇〇メートルならば、早めに仕掛けてもゴールまで余裕を持つて行けると確信していた。

速度を上げて差しのバ群を大外から横切ると、先頭集団を捉えたから、私はここ

だと一気に踏み込んで、溜めた脚を爆発させた。まだマチカネフクキタルのようにはいかないが、それでも十分な威力が私の末脚にはある。勢い任せに先行集団を追い抜き、先頭を走るウマ娘までを追い抜くと、夢中のままゴールラインを踏み越えた。

息を整えながら立ち止まって掲示板を見ると、六バ身との表示が出ている。振り返れば実況がさながら一瞬の雪崩の如くだと騒ぎ、観客が口を揃えて私の名を呼んでいる。それでやっと、勝ったのだという実感が湧いてきた私は、大いに笑って、右の拳を天高く突き上げてこれに応えた。客席からは、盛大な拍手と歓声が降り注いでいた。

レースが終われば、ウイニングライブである。衣装に袖を通してステージに立つと、色とりどりに光る海が広がっていた。勝者だけが見られる景色を目の当たりにすると、一生懸命に走った甲斐があつたと報われる気持ちになる。何とも感慨深いものだ。最初こそ、何で全力で走ったあとに、歌って、踊って、知らん奴らにまで愛想を振り撒かにもあならんのだと思っていたが、この景色を見てしまうと考えも変わった。

さても肝心のライブだが、私はスベと違つてきちんと練習していたから、さしたる滞りもなく終えることができた。踊っている最中に客席を見ると、いつもの奴らがサイリウムを振っているのが見えた。スベなんかは、自作したらしい「投げチュウちようだい」の団扇まで振っている。お望み通りそちらに向かつて投げてやると、黄色い悲鳴をあげるから愉快だ。これを目当てに走るといっても、存外と悪いことはないのかもしれない。客席の後方にはティエムオペラオーの姿があつた。横には女狐の姿もある。暗がりのせいでその表情は窺えない。今度こそは期待に応えられただろうか。心中で問いかけた時に、彼女がうつすらと微笑んだように思えた。

ライブを終えて学園に戻ると、シリウスで祝勝会をすることになったのだが、これは少し失敗した。祝勝会には、いつもの奴らも呼び出して一緒に祝うことにしたのだが、ここで私の悪い癖が出た。何でも同じ顔だけじゃあつまらないと、帰宅途中の子供理事長を攫さらつてきて祝勝会に参加させたのだ。日頃の感謝を込めて招待しようとしたのだが、今思えばそれにしたって無鉄砲も極まっている。

攫さらつたのは便所に行った帰りだった。正門前にいた所を私が無言で後ろから抱え

上げると、子供理事長は「何事!？」と悲鳴を上げた。そのまま走ると次は「拉致〜!？」と変に叫んだ。無論拉致であるが、それをまんま叫ぶのは何だか滑稽だ。部屋に着いたら子供理事長は眼をしばたかせて、「驚愕!　ここはシリウス!」と当たり前のこと云うから失笑してしまった。みんなは子供理事長を抱えてきた私に驚いて、ものも云えなくなっていた。

困惑しきりの子供理事長に、私は今日のレースについて話して、貴女が温情をくれたおかげで、私たちは夢への一步を踏み出せました。ありがとうございますと頭を下げた。それで子供理事長は意図を察したか「祝辞!　君たちの一步が、やがて大きな偉業に繋がることを願っている!」と笑って扇子を仰いだ。やはりこの子供理事長は気持ちが良い奴だ。

そのあとは子供理事長も交えて、楽しい時間を過ごした。さすがに子供理事長の拉致は許されなかったので、笑顔のグラスワンダーにオイタが過ぎますよとタワーブリッジなる技でお仕置きされてしまったが、それさえも私にとつては楽しいものであった。願わくばこの歓喜が、天上にいる白毛の友人に届くようにと祈るばかりだ。

次の日に生徒会室へお札を云いに行ったら、お札は受け取ってもらえたが、理事長拉致問題を起こした代償として、一週間の便所掃除を云い渡されてしまったから大変だった。今回ばかりはさすがに反省はしたので、次からはなるべくばれないようにするつもりである。

陸

日の出から少しして起きると、いつもならまだぐうたらしているマチカネフクキタルが、部屋にいないことに気が付いた。朝練をしている訳でもないのに、こんな時間からどこへ行ったのだと外へ出たら、ちょうど帰ってきたらしい運動着姿のマチカネフクキタルと、入り口でぶつかって尻もちをついてしまった。やいどこへ行っていたんだと聞けば、妙に目が覚めてしまったから走りに出ていたと云う。珍しいこともあったもんだと思った。

しかし後になって、私がつかつた時にこいつはよろめきもしなかつたのだと気が付いて、ちよつと魂消た。さすがに菊花賞ウマ娘である。まだまだ追いつくには遠い背中だ。

デビューからしばらくたつたが、私とスベは変化もなく、次戦のオープン戦も危なげなく勝つて、順調な滑り出しを見せている。

スベのほうでは、駄洒落皇帝の命令で、ウイニングライブの練習をしているそうだ。スベのデビュー戦からあくる朝、干物が日刊トウインクルという新聞を持ってきたから、二頁ページを開けてみると驚いた。スベのデビュー戦がちゃんと出ている。デビュー戦が出ているのは驚かないのだが、地方からの転入生であるスペシャルウィークがデビュー戦を快勝したものの、ライブでは天を仰ぐ見事な棒立ちをして初々しい姿を見せたと書いて、彼女が第二のオグリキャップになることを期待するとの意見が附記ふきしてある。聞くにこの記事が、皇帝の逆鱗むへに触れたと云う。レースは良くても、ライブをああも疎かにしては、それも宜むべなるかなだ。

この新聞記事を書いた奴はできる奴のようだが、スベにはいささか大げさにすぎる。新聞なんてむやみに大げさに書くもんだ。世の中に何が一番大言を吐くと云つて、新聞ほどの大言吐きはあるまい。これでスベが気負つたりしたら、どうしてくれるつもりだろうか。干物は心配のしすぎと苦言したが、こんなのはいくら心配したって足りないものだ。ただ昼になってスベに新聞の話をしたら、恥ずかしいからやめると云われてしまったので、金輪際この話はしないことにした。また同じこと

を云われても堪らない。

私はと云えば、矯正した姿勢も随分と様になって、メイショウドトウとのシャトルランでも何とか追いつけるようになった。姿勢に関しては、完成を見たとしても過言ではない。このままいけばひと月で、こいつに負けなくらい立派な形になっているだろう。私は順調に、堅実にダービーに向けて駒を進めていた。

そんな風に順調な訳だから、ある日の練習終わりに、そろそろ重賞に出ようと干物が云った。円満にダービーを走るには、前哨戦たる青葉賞で、二着以内にはいり優先権を勝ち取るか、弥生賞から皐月賞を経てダービーへ行く三冠路線に進まなければならぬ。皐月賞と云えば我がスベに加え、同期であるセイウンスカイとキングヘイローの両名も、三冠を目指すため弥生賞への出走を決めたと聞いたので、弥生賞から始まるクラシック路線に行くなら、こいつらとの激突が必至となる。

この事実干物は、三冠路線は厳しくなりそうだねと顔を顰めていたのだが、どうせダービーで対決するのだから、遅いか早いかの違いでしかない。なら何でも早いほうが良からうと肩を竦めたら、じゃあ皐月賞にしておくよと苦笑して云うので、まずは三月の頭に初の重賞たる弥生賞に出ることになった。青葉賞のあの字もない大将ハナからこつちで行くつもりだったらしい。

すぐ弥生賞に決めた理由をあとで聞いたら、何でも青葉賞からはダービーウマ娘が出た試しがないので、験を担ぐためにもこつちへ行くと決めたそうだ。よっぽどくだらん迷信とは思いますが、それを云うとマチカネフクキタルがうるさいから、黙っておく。

そう決まれば、早速弥生賞に向けての練習にはいる。矯正を続けていた上半身に關してはすでに完成が見えているので、あとはこれによつて生み出した力を、十全に下半身へ行き渡らせて、末脚に繋げるための擦り合わせのみとなった。

ところがこの練習なのだが、どうにも上手くいかず苦戦している。姿勢の改善により、最後まで脚は残るようになったのだが、全身の力を使って加速するとなると、途端に難しくつて計が行かない。今までがずつと、脚の力に任せた強引な加速であつたがゆえに、この全身を使った加速というのが、どうすれば上手くいくのかわからない。干物は一生懸命に教えてくれるが、私は学がない田舎者だから、一向に取っ掛かりを掴めないんだ。

ひとりであうんと考えても苦心も極まったんで、だめ元でどうしたらそんな末脚ができるのだとマチカネフクキタルに聞くことにした。すると、まずは重心を前に持っていくを意識してくださいと、真面目な答えが返ってきたから魂消た。こいつのことだから、つつきりシラオキ様を信じなさいとでも云うと思つていたのだがどうやら今回ばかりはふざけるつもりもないようだ。

お前は真面目な顔もできるのだなと云つたら、「もう！ さすがに怒っちゃいますよ！」と可愛らしく頬を膨らませたので、手で両頬を挟んで空気を抜いてやった。そしたらぶべあと云つて変な顔をするから、あとで思い出し笑いをして大変だったしかし重心を前に移動させるとは云うが、簡単にできたならこうまで苦労はしてない。どうすれば良いと聞けば、「コツを掴めば簡単です！」と両の親指を立てて見せると、私の身体に手を回して、直接身体を動かして重心移動の仕方を教えてくれた。これは存外にもわかりやすく、おかげでやり方も理解できたから難有いことこの上ない。

普段からこう静かで、真面目ならばもつと難有いと思つたが、おとなしいマチカネフクキタルというのも何だか想像がつかないし、変なので、今のままがちょうど良いのかもしれない。

それから時は進み、三月ときた。ついに弥生賞の開幕である。

干物の車で、中山レース場にはいった。メイショウドトウは先にいつもの奴らと客席にいる。マチカネフクキタルはそもそも来なかった。仲間の晴れ舞台に來かないなんて、見かけより薄情な奴である。しかしあいつにはあいつの用事があるのだから、予定があわなくなつてしようのないことだ。

パドックでの見せが終わると、干物とふたりきりで控室で最後の作戦会議をした前日の作戦会議では、仕掛けは第三コーナーを抜けたらすぐで、末脚を使うのは坂道を上り切つてからと決めていた。今は他の奴らの調子も見たから、その細部を煮詰めている最中だった。

干物はむつつりした顔をして、作戦は変わらないけれど、やつぱり同期のみんなが調子良さそうだったから気を付けてと聞かすので、もとよりあいつらには気を付けていると云つた。一番人気のキングヘイローは二度も重賞を走っていて、そのうち前々走の三東京スポーツ杯ジュニアステークスで勝利している。先に重賞で

勝っているから、手強いだろう。いかにも昼行燈としたセイウンスカイだって、私と同じように、前走のオープン戦で鮮やかな勝ちを披露しているから、こいつの動向にも油断ができない。どっちも一筋縄ではない相手だ。

憂い顔をしたきりの干物は、まだ何か心配事を云おうとしてたのだが、私はそれを負けたってそれは糧になるんだから、そう心配したものじゃないと遮って、ゼッケンを身に着けた。干物はそれで、聞きかけていた口をやおらと閉じた。顔まで伏せた。何だか変な反応だ。少し気になったが、係員が呼びに来たから、そっちに気を取られて詳細は聞かなかった。

地下バ道からターフに出ると、驟雨しゅううの如く降り注ぐ歓声が、全身を振るわせた。数万を超える観客がスタンドに集まって、鬨の声を上げている。まったく圧巻だ。これにはさしもの私も我知らず唾を飲んだ。流石に重賞、それも皐月賞の前哨戦だけはある。神経が昂って、武者震いまでした。

ゲートにはいる前に、三人に声をかけたら、最初にキングヘイローがキングに相應しい走りを見せてあげましょうと云ってホホホと笑う。セイウンスカイは私はゆるりと行かせてもらうよと肩を竦めて見せた。スベもいい戦いにしようねと意気込んでいる。私も負けてやるつもりはないので、勝っても文句なだけと返して、笑いあって、ゲートにはいった。

全員がはいり、構えを取つたら、途端にゲートが開く。余韻や感慨に至る間もなく私の初めての重賞レースが始まった。

真つ先に飛び出して逃げを打つセイウンスカイとは逆に、私は相も変わらず追い込みで、最後方からレースの状況を窺っている。追い込みで走る私のほうは、縦長の展開にされるのは好ましくない。あんまりに長くされると、中山の直線は短し、坂もあるから、もしかしたら差し切れなくなる。だが、前方に形成されたバ群は、これに釣られた様子を見せず、固まっているからひとまずは安心か。

キングヘイローは、中団より少し上の位置に居る。先行とも差しともつかない中途半端な位置だから、セイウンスカイに釣られたと見るか、スベと重なるのを嫌つたと見るか、どうにも判断が難しくくて油断ならない。末脚自慢でもあるから、あいつの仕掛けには注意しておくべきだろう。

スベは中団後方で、差しの位置を取っている。わずかに外を走っているのは私へ

の駆け引きかと考えたが、あいつが駆け引きをできるとは思えんので単純に外めにつけただけだろう。

状況の確認が終わると、向こう正面にはいった。ここからは少し小細工を弄する。小細工と云つても、別段何かする訳でもない。ただ私の前にある差しの奴らの所まで上がつて、これの後ろにくつつくだけのことだ。こうすると私は風の抵抗を受けずに走れて、前の奴らは、追い込みの私が真後ろに着いた圧で焦る。下手に前へ行くとして、脚を使う。中盤でやるのは生温いやり方だ。しかし最初から掛かりが伝播して、縦長にされても叶わないのだ。

第三コーナーにはいると、私は自分の判断で仕掛けた。ここからスベを含むバ群を、間を割つてゆるりと抜き去つた。十三人立てだから、隙間はたくさんあった。これが十八人だったら大外を回るしかなかっただろう。

第四コーナーにはいる頃には、二着の位置にいるキングヘイローの後ろに付けたすると私のことが気になったか、ぐんと加速を始める。こいつはしめたものだ。坂を前にこんな無茶な加速をしては、よっぽど体力が余っていない限り、最後まで脚が残っちゃいないだろう。どんな作戦を考えていたかは知らんが、溜めた脚をここで使つては文字通り無駄脚だ。

こうなれば問題はハナを進むセイウンスカイだが、あいつもあいつで、この場面で加速するだけの脚はないと見た。逃げというのは、進み続けるには相当の体力と、集中力を使いながら、試合の流れを作つて、後方との駆け引きも行わなければならぬ。まあ大変に根性がある作戦だ。私にはとてもじゃないが真似ができない。ヤブサメオーでもあるまいし、いくらセイウンスカイとて、このままの調子で逃げ続けることはできない。前方ふたりがこれならば、この勝負は貰つたも同然だ。

第四コーナーを抜けると、そこは心臓破りの坂であつた。スタンドが沸いた。ハロン棒が光つて見えた。いよいよ踏み込んだこの勾配は、客席から見下ろすのではわからぬ険しさがある。幾多のウマ娘を呑み込んできた、ある種の魔物であるときえ伝えられて、決して一筋縄には超えられない。実際私も一筋縄ではいかなかった。

坂を登り始めたら、セイウンスカイは残していた脚を使つて加速した。それでもやはり速度がとんと落ちている。キングヘイローも、なけなしの体力で懸命に登っているが、二着から上がる気配もない。もはやこのふたりには、私を突き離すだけの

力が残っていないようだった。

とうとう抜け出す。私はマチカネフクキタルに教わったように、重心を前に動かし、必殺の末脚を使うための構えを取った。坂を登り切ったその瞬間に、これを使う算段であった。そして、はたして坂を登り切ったその時に、私はこの溜め込んだ脚を炸裂させようとした。

しかし勝負と云うのは、往々にして思い通りにいかぬのが現実である。

ふと客席から大きな歓声が上がった。はたと後ろを見やれば、スベが登って来て私のすぐ後ろにまでつけている。どつと怖気が背筋に流れ込んだ。ゆつくりと視界の端に映ったスベは、芝を踏み込んで加速しようとしている。させるものかと慌てて踏み込んだ。だが焦りは私の末脚を殺した。慌てた踏み込みのせいで重心移動が乱れてしまい、末脚はただ力任せなだけの一步に成り下がった。南無三、失策と悟った。束の間には、呆然と見送ったスベの背中が、セイウンスカイを追い越して、ゴール板を踏み越えていた。

己がスベに負けたのだと気がついたのは、それからすぐのことだ。

掲示板を見上げると、私の番号が灯った。四着だった。並んでいたキングハイローとはハナ差だ。四着はステージに上がれない。私はセイウンスカイにも、キングハイローにも、ましてやスベにさえも負けていた。

私は不思議に思った。スベに敗した事実がにわかには受け入れられず、ただそのまま掲示板を見上げていた。突っ立っていると、寄ってきたスベがまずは私の勝ちだねと云うから、私はスベの頭を撫でて、お前の脚には驚いたぞ。いつあんなの身につけたんだと誉めてやった。スベは嬉しそうに顔を綻ばせたが、すぐにチームのみんなの所に行つてくるねと云って、沖野の元へと駆けていった。それで私は、やっと自分が負けたんだと気付いた。みんなに勝利を祝福されているスベの姿は、私にとって、何よりも耐え難い屈辱の形のようなだった。

控室に戻ると、干物が涙に濡れた顔で座っている。近寄つたらぱつと立ち上がった、ほとんど泣き崩れるみたいにしてごめんなさいと云った。何に對しての謝罪かと聞けば、私のせいで負けたからだと言った。

この物云いは腹が立った。負けたのは私の責任だ、走っていた私が判断を間違えて、勝ち筋を掴めずに負けたんだ。それを無断で取り上げて、自分のせいだと泣かれ

たんじゃあ、私だつて遣る瀬がない。この気持ちは私だけのもんだ、誰にだつて渡してやるものか。

「思ひ上がつてもらつちや困る。こいつは私の負けだ。私だけの負けだ。お前が泣いて謝る筋合いはない。お前もトレーナーなら、自分の責任だ何だと云う前に、もつと他に云うことがあるだろう」

「でも、だつて……私が、しっかりしてれば……」

「云い訳するのか。走つて、負けた私は、ちつとも云い訳なんかしてないのに。情けない、そんなでトレーナーが勤まるもんか。過去に何があつたか知らないが、私のトレーナーならしゃんとして、どうして勝てなかつたんだと文句のひとつくらい云つてみる」

干物が驚いた顔をして黙ると、私はこいつの胸ぐらを掴み上げて、私の言葉が許す限りに干物の弱気を叱りつけた。

「私の眼を見る。この眼は、前にいたような薄情の、猫被りの、腐つた性根の奴らとは違う。それなのに、こうもへりくだつて、媚られるのは甚だ不愉快だ。侮辱も極めてやがる。私がそんな薄情な奴に見えるか。負けただけでお前を無能だなんだと手酷く捨てるような奴に見えるのか。もしそうなら見損なうな。……私の夢を聞いたことがあるだろう。私の声は、違うか」

干物は首を振つて、違わないと嗚咽交じりに云つた。私は干物の胸ぐらを離して椅子に座らせた。それから、乱暴して悪かつたと謝つて、乱れた服を元に戻して、涙を指で拭い、だつたら堂々とすりゃあいいと云い含めた。

何でも精一杯やつたのに、それを自分で否定してちやあ癖がつく。負けを認めないのと同じだ。遠吠えだつてできやしない。負けることもできないのは憐れも通り越して滑稽だ。

干物は何も云わなかつた。私が、ゼッケンを外して服を着替へたら、やつと思ひ出したみたいに口を開いて、ありがとうと不器用に笑つた。私はハナを鳴らして、最初からそうしておけばよからうにと返すと、荷物と一緒に控室を出た。そろそろスベのライブがあるんだ、遅れちやあ負けた以上に後悔する。

みんなのところへ行くと、真つ先にメイショウドトウが駆け寄つてきた。気の毒に口端を下げて泣きそうな顔をして、負けちやいましたね。あともうちよつとだつ

たのにと云うから、反省して次に活かさなけりやならんなど笑顔を見せてやった。メイショウドトウはそれで少し安心したらしかった。

エルコンドルパサーと、グラスワンダーと、ハルウララのみんなも来て、今回は残念でしたねと一様に言葉を並べるから、だが次は負けてやらないさと胸を張って答えた。テイエムオペラオーは少し毛色が違って、壁は高かったかいと聞いた。高いが上り甲斐がありそうだと云ったら、満足してさすがボクのリヴァルだと云った。リヴァルは何だと聞くと、フランス語でライバルという意味だと教えてくれた。そうならそうと英語で云やあい。英語なら得意だから、私だつて気の利いた返しだつてできるのに。

ウイニングライブが始まったら、私はスベに歓声を飛ばした。スベに負けたのは悔しいが、それとこれとはまったく別である。鉢巻を着けて、団扇とサイリウムを振って、めいっぱい楽しませてもらった。ちゃんと練習してきたのか、ちよつときこもなく歌い踊るスベは、やはり可愛いものであった。

ライブが終わったら、みんなと別れて、干物の車で学園に帰る。スベたちに会わなくていいのか聞かれたが、明日会ったら挨拶したらいいと答えた。今はチームの仲間と喜んでいる所だろうし、水を差すほど私は愚かではない。

車に揺られていると、助手席のメイショウドトウが干物の顔を見て、何だか雰囲気が変わりましたねと云った。干物は少し恥ずかしそうに眼を細くして、「私のトレーナーなのに情けない顔してるな。つて怒られちゃったからね」とバツクミラーを見た。そうなんですかと納得した顔をして、メイショウドトウも振り返った。ふたりして私を見るものだから、なんだか急に居た堪れない。思わずそっぽを向いて運転中なんだから前を見ていろと云ったら、ツンデレさんとメイショウドトウが笑いやがった。気弱のくせに生意気なんで、仕返しとして、後ろから頬を引っ張って悪戯してやった。メイショウドトウはヒンと鳴いて、干物は楽しそうに声を上げて笑った。干物の大きな笑い声を聞いたのは、この日が初めてだった。

干物メイショウドトウと別れて自室にはいったら、マチカネフクキタルがいつもの能天気な笑顔で出迎えてきたから、私のレースは見に来ない癖に出迎えはするのかわやおやと失望した。

マチカネフクキタルは私を部屋にいと、初めての重賞はどうでしたと聞いた

どうもこうも負けたがと云ったら、まあでしょうねとあつげらかんと云うからます腹が立った。仲間のレースも見に来ないで、わかった風に云いやがる。何がそうでしょうねだ薄情者め、失礼にしても度が過ぎている。いつそこつびどく撲つてやるうかとまで思ったが、マチカネフクキタルが私を抱きしめて、頑張りましたねと云うから拳の力が抜けた。

「人がたくさんいて、雰囲気も違っていて、いつも通りとはいかず。力を出し切れなくて悔しかったでしょう」

「そんなことあるもんか、私はいつも通りだった」

「だったら、猶更に悔しいでしょう。葉隠さんから聞きましたよ。同期のみんなと一緒のステージにも立てず、傍から眺めてるしかできないなんて、耐えられないはずです」

「そんなこと、ちつともない」

「強がっちゃいけませんよ」

見透かしたように窘めて、マチカネフクキタルは私の頭を撫でた。あまりにも当たり前にするから、私は閉口して受け入れるしかできなかった。

「強がっちゃ、いけませんよ」

私が黙っていると、マチカネフクキタルがもう一度、さつきよりもずっと優しい声色で繰り返した。

「初めての重賞で、同期のみんなに負けて、ステージにも立てなくて、それなのに悔しくないなんて、そんなのは酷い強がりですよ。リギルの試験で負けたことに、悔し涙を流していた貴女なのに、そんなはずないじゃないですか」

私は言葉に窮した。本当なら自在に反論してやりたかったけれど、ほとんど凶星に近いことを云われてしまったから、何も云い返せずに口をまごつかせたきりだった。

「貴女はお姉ちゃんだから、きつと簡単には泣けないんでしょう。特に妹分の幼馴染に負けてしまったから、なまじつかに泣くのは自分が許さない。だから、こうして我慢してるんですよ」

「我慢なんて、わたしは……」

「お姉ちゃんだって、泣いてもいいんですよ。我慢しなくて良いんです。もしみんな



の前で泣けないのなら、私が胸を貸します。誰にも見られないように、傘になりますから。せめて私の胸の中だけは、お姉ちゃんとしてではなく、ひとりのウマ娘として、泣いてください」

ひと際強く抱きしめられると、私はついに耐えきれなくなつて、声を押し殺して泣いた。

妹分のスベに追い抜かれて、同期のキングヘイローにも、セイウンスカイにも追いつけなくなつて、私だけ置いて行かれたのだから、悔しくて、苦しくて、悲しくて、泣きたいに極まつてる。私だつて人の子だ、十と少しのウマ娘だ。本当は無理して我慢なんかしたくない。けれども私はお姉ちゃんだから、みんなに弱い所を見せられないんだ。

終いにはもう自分では涙も止められなくなり、マチカネフクキタルに縋りついて泣きじゃくつた。マチカネフクキタルは何も云わずに微笑んで、私の気が収まるまですつと抱きしめてくれていた。

お読みいただきありがとうございます。

体験版はここまでとなります。

続きが読みたい場合、ハーメルンでの連載分、または電子書籍本編で
お楽しみください。